

第一二七回

史跡めぐり案内（北鎌倉）

円覚寺

東慶寺

浄智寺

建長寺

越谷市郷土研究会

理事 山崎善司

第一二七回史跡めぐり案内（北鎌倉地区）

日時 十月二十三日（日） 午前七時五〇分 集合

集合 越谷駅前集合 午前八時十三分発（浅草行準急）

行先 越谷駅 ー北千住乗替 ー秋葉原乗替 ー東京駅乗替 ー北鎌倉駅下車

コース 円覚寺 ー山門・仏殿・銅鐘・帰源院・妙香池・仏日庵・舍利殿・他塔頭

東慶寺 ー山門・仏殿・銅鐘・資料館・名士文人の墓等

浄智寺 ー甘露ノ井・山門・総門・本堂・庭園竹木等 ー昼食

建長寺 ー総門・三門・仏殿・法堂・庭園・唐門・西来院・梵鐘・柏櫃

ー他塔堂 ー解 散

帰路 北鎌倉駅 ー東京駅 ー秋葉原 ー越谷駅

案内者 山崎善司 理事

会費 一金、四〇〇〇円也、（交通費・見学費・資料代・保険料他含）

（但し、昼食は各自持の事、（食堂利用）

鎌倉



神奈川県

歴史の流れに沿って

我が国の歴史の流れの中で、鎌倉期・戦国時代・江戸幕末期と、大きな歴史の転換期において神奈川県が占める位置は極めて高い。鎌倉は、源頼朝が我が国最初の武家政権をうち立てた所であり、下つて戦国時代小田原を本拠とした北条早雲が南関東を席卷、2代・3代と代を重ねて関東を制覇し、5代氏直の時豊臣秀吉の大軍勢に攻められ、小田原城攻防戦の末、北条5代百年の幕を閉じ、そして幕末、横浜が開港場とされ、文明開化の先駆けをなした事は良く知られている。

原始時代

縄文時代

神奈川県に人が住みついたのはかなり古い。先住民達が土器（縄文土器）を造り始めたのは九〇〇〇年ほど前からと推定されている。海辺に突き出た丘などに横穴住居を造り、獣や魚・貝・木ノ実等を求めて生活をしていった。

当時の文化の中心であつたと見られる県の東部には、数多くの遺跡があるが、中でも横須賀市夏島の夏島遺跡・同市深田台の平坂遺跡は有名である。夏島遺跡からは我国最古の縄文土器とされる熱系文土器・獣骨・石器・骨針・貝輪等貴重なものが出土している。平坂遺跡からは、熱系文土器と共に人骨1体が発見され、縄文時代最

古のものと推定されている。又平塚市の勝坂遺跡は縄文中期の標準的遺跡として知られているが、異色ある装飾をもつ土器が発見されている。

弥生時代

狩猟にかけていた生活が、気候・風土の変化に適応しつゝ、犬を飼ひ共同で狩りをする生活と、漁をする生活が見り合つて来る。やがて米作りが弥生式土器や鉄製の道具と共に伝播して来る。

小田原市中里の集落跡からは、弥生式土器の中では中期に属する須和田式土器が出土、県北東部鶴見川流域からは弥生式土器と、農業集落の跡と見られる所が発見されている。又横浜市の青木遺跡からは、舶来の装飾品のガラス玉が発見され西方文化の流れを感じさせる。

古墳時代

三角神獸鏡は3・4世紀ごろ中国魏からもたらされたもので、当時大和政権が地方長官として任命した時、承認の印として授けていたものという。

川崎市白山古墳から出土した三角神獸鏡は、山口県竹島古墳や京都府の大塚山古墳のと同じ類型で造られた三角神獸鏡であつた事は、この古墳の主が大和政権の被官人であつた事が推測される。その他に平塚市大塚山古墳・寒川町大神塚古墳・海老名市伝国造古墳など11基を数えるのみで、神奈川県に確認されている古墳の数は比較的少ない。（同じ関東地方で群馬には一〇〇基余の古墳が確認されている）

古 代

相模国

古代の文献の中で、大化改新（645）前のこの地方について語るものは少ない。相模の名が文献に見えるのは和同5年（715）に完成した「古事記」が初めて、景行天皇の巻の倭健命（やまとたけるのみこと）の東政の段に、妃弟橘姫の走水（浦賀水道）での入水の項や、箱根の唯水津で妃をしのび「あづまはや」と記されている。

このころの県域は、相武（さがむ）師長（しなが）武蔵（むさし）などの国に分けられていたが、大化改新により国造制は廃止され、東部武蔵国の一部に、中・西部が相模国に改められた。

相模国の国府は海老名市にあつた。次いで天平13年（741）聖武天皇の詔により相模国分寺が建てられ、そびゆる堂塔・伽藍と共に相模の文化の中心となつた。

班田制が有名無実となるにつれ、地方には土豪達が開いた地が荘園となり土豪は荘司となり荘園経営の実権を握り荘地・荘民を実質的に支配し、次第に武力と権力を貯えていつた。武士の発生である。

三浦半島を開発した三浦義経も開発地を中央貴族に寄進して荘司となり三浦半島を支配した。後に源頼朝挙兵の支えとなつた三浦一族である。

中 世

頼朝と鎌倉

平安末期、安房下総におこつた平忠常の反乱を平定する

為、中央から源頼信・頼義父子が派遣された。鎮定後頼信は相模守に任ぜられ、康平6年（1063）頼義が武源家の故地となり、ここを本処に相州武士達の棟梁としての地位を固めるに至つた。

頼義の曾孫義朝が平治の乱（1159）で平清盛に敗れて後、一時相模・武蔵の両国は平家方の大庭景親の勢力下に置かれたが、治承4年（1180）伊豆斐山に打倒平氏の旗を挙げた義朝の子頼朝は、緒戦の石橋山の合戦で大庭軍に敗れたものゝ房州安房へ逃れ、千葉氏の援助を得て再挙、鎌倉に入つた。東国武士の支持を得た頼朝が、平氏を壇ノ浦（山口県）に滅ぼしたのは旗上げから5年後の文治5年（1185）で、建久3年（1192）には征夷大將軍に任ぜられ、鎌倉に我国最初の武家政権である鎌倉幕府を開いた。

鎌倉は三浦半島の西側基部に位置し、南部は相模湾に臨み、他の三方が丘陵に囲まれた要害の地にある。頼朝はこの地の都市造を試みて、鶴岡八幡宮を中心に幕府役所や諸部将の屋敷を配し、京都の朱雀大路に模した若宮大路を始め、諸道路を整備し、勝長寿院・永福寺等の荘厳華麗な大寺院を建立した。以来一五〇年間にわたる鎌倉幕府の基礎が築かれ、我国の政治文化の中心地として栄える事となる。

鎌倉時代

建久一〇年（1199）1月13日頼朝が死で、その子頼家が將軍となるも、元久元年（1204）伊豆修善寺で殺され、実朝相統するも、承久元年（1219）鶴岡八幡宮の境内にて凶刃に倒れるという悲運に源氏の正統は僅か三〇年で滅び去つた。

源家正統の無き後の鎌倉では、鎌倉幕府擁立を助けた

堵符の内、正治2年(1200)梶原景時・景季滅び、
・建仁3年(1203)比企能員一族と一幡が滅び去り
・元久2年(1205)6月畠山重忠父子も滅亡に追込
まれ、同7月北条義時の父時政は源実朝の暗殺を計画し
義時・政子と腹違いの娘婿平賀朝雅を擁立しようと謀り
失敗して朝雅は珠せられ、時政は伊豆に隠退させられる
・同8月宇都宮頼綱討伐し、頼綱出家する。建保元年(1213)和田義盛挙兵したが敗死、頼朝以来の実力者も滅亡す。

かくて幕府の実権は北条義時の握るところとなり、執権北条家の座は確固たるものとなつた。元仁元年(1224)(8月北条義時没す)翌嘉禄元年(1225)北条政子も没し、3代泰時の時代となる。

5代時頼から8代執権時宗のころ、その全盛期を迎えた。鎌倉の繁栄も又絶頂に達し、道路・港・市街が整備され、大倉辻・大町・米町・魚町などの繁華街が生れ材木座あたりは木材の取引で賑わつた。

又当時、外来の最も新しい宗教思想であつた禅宗は、京都文化に対抗しようとする関東の諸武将の精神的より所ともなり、宋から来朝した蘭溪道隆・無学祖元らの名僧を迎えて、建長寺・円覚寺等の大寺院が、時頼・時宗等の手により建てられ、長谷の大仏もこのころ淨財により造られたものである。

一方庶民達の間にも既成の天台・真言・浄土宗に代つて、新しい宗教が広まつた。安房に生れた日蓮が鎌倉に庵を結び、情熱的布教活動で日蓮宗を広めた事は良く知られている。一遍上人が開いた時宗も又相武の地に大きな足跡を残している。藤沢市の清浄光寺・相模原市当麻の無量光寺等それである。

金沢文庫

東京都・奈良の王朝文化に対して鎌倉のそれは質実剛健

を基調とした武士の文化であるといわれている。その様な鎌倉文化が残したもので、注目されるものとして金沢文庫がある。

金沢文庫は、2代執権北条義時の子実時が、清原教隆に師事して勉学に励むかたわら蒐集し、書写して長年蓄跡してきた和漢の書を、建治元年(1275)金沢の別荘内(横浜市金沢区称名寺)に建てた文庫に納めて公開したものである。その管理は実時の子頭時に引継がれ、3代貞頭の時最も充実したといわれる。

文庫には称名寺の学僧刃阿、湛叟等の講席も設けられ鎌倉の文教興隆に貢献したのみならず、四方から好学の士を集めた。徒然草の著者として有名な兼好法師も、この文庫を利用したと伝えられている。

南北朝期

文永・弘安年間(1274~81)蒙古の襲来(元寇の役)を迎えた鎌倉幕府は、執権時宗を総帥に全力を挙げて戦い、これを撃退した。然し結果的には財政的に危機をもたらし、幕府内における権勢の争奪、御家人の離反等多くの問題を抱えて衰え始めた。14代執権高時の元弘3年(1333)新田義貞の軍に滅ぼされた。建武の新政である。

一方足利尊氏は、元弘の乱の時幕府軍として西上しながらも丹波桑田郡(京都府亀岡市)で幕府に反旗を翻えし、六波羅探題を滅ぼして建武新政第1の功臣となつたが、建武2年(1335)再び新政権に反逆し、箱根竹ノ下に新田義貞の軍勢を破り、尊氏追討の軍を向え討つべく京へ上つた。

相州の武士達も、松田・河村氏等は南朝方に、波多野・曾我氏等は北朝方に分れて戦い、南北朝の動乱期が始まる。延元元年(1336)11月尊氏により京都室町

に幕府が開かれると、鎌倉には関東地方を統治する鎌倉府が置かれ、尊氏の弟直義が入府した。鎌倉公方職は直義に次いで尊氏の長男義隆と変り、正平4年(1349)には義隆と交替して、2男の基氏が入府した。以後基氏の子孫の氏満・満兼・持氏と継承するが、次第に執事の上杉氏に勢力を奪われた。

新田義興の乱(1352)・上杉禪秀の乱(1416)等度々の戦乱に見舞われた鎌倉は次第に荒廃し、特に持氏が禪秀の乱の残党狩りに行過ぎがあり、幕府と反目し合い、反逆者とされ、永享一〇年(1438)幕府の命を受けた上杉憲実と戦い敗れ、鎌倉永安寺で自殺してからは、関東の中心を失い、西相模には大森氏、三浦半島から鎌倉一円には三浦氏が割拠し、上杉氏も、山ノ内・扇ヶ谷などに分れて、血を血で洗う戦国時代を迎える事となる。

戦国時代

戦乱に明け暮れる相模国を統一、南関東に強大な領国を築いたのは、伊豆韭山に起つた伊勢新九郎長氏、後の北条早雲である。

駿河今川氏の客将であつた長氏が、室町幕府が設けた伊豆堀越府を攻め、足利茶々丸を敗死させたのは、延徳3年(1491)で、明応4年(1495)には小田原を攻め、大森藤頼を追つた。小田原を本拠に定めて築城にかゝると同時に、転戦して東伊豆の土肥党を討ち、鉾先を東に転じて相模守護三浦道守を岡崎城(伊勢原市)を攻めたのが永正8年(1511)、逃げる道守を三浦の新井城に追いつめ、永正13年(1516)これを壊滅させた。

伊豆・相模の両国を掌中に納めた早雲は、永正16

年(1519)88歳で没した、その子氏綱も叛囚を拡大、3代氏康の時代にはほとんど全関東を領土とするに致つた。氏綱は、源家の跡目を継ぐ意織を内外に示し、先の戦乱で焼失した鶴岡八幡宮を再建、他の社寺にも保護の手を指延べ、更に悪貨を追放して永楽銭を統一貨幣にし、奈良・京都より優れた職人を招く等民政に力を入れ、小田原城下は活気に満ち、その全盛期を迎えた。幕府滅亡後の鎌倉に変わつて、小田原は北条5代、約一〇〇年間にわたり関東地方の政治・文化の中心地となつた。

西国を統一した豊臣秀吉が関東征伐を計画し始めたのは天正16年(1589)ごろの事である。海・陸合せて15万人余の軍勢を動員して天正18年初め関東各地に一声に攻撃、北条方の支城を次々と攻落、小田原本城を包囲したが、過去上杉・武田軍の猛攻にも耐えた堅城、秀吉も容易にこれを抜く事が出来ず、石垣山に城を築き持久戦に入つた。守る北条方は5万余、良く攻防戦を戦つたが遂に籠城三ヶ月余り、7月9日城を開け渡した。城主北条氏直は高野山に追放、氏直の父氏政と叔父氏照は自害、5代続いた北条氏は滅びた。

小田原城に入つた秀吉は、徳川家康に北条氏の日領を与えた。家康は小田原を家臣の大久保忠世に守らせ、自らも江戸に居城を定め、以後三〇〇年の本拠となつた。

鎌倉市

古都鎌倉。：奈良・京都と共に、我が国を代表する国際観光・文化都市として知られている。源頼朝がここに鎌倉幕府を開いたのは建久3年(1192)で、以後700年間続く武家政治の発端となつた。

鎌倉幕府は元弘3年(1333)の、新田義貞の鎌倉攻めで幕を閉じるが、その後も関東管領足利公方家の館が置かれ、室町末期、北条早雲の本拠小田原、繁栄を奪われるまで、関東地方における政治文化の中心地となつていた。

鎌倉文化は、奈良・京都の貴族的な王朝文化と対照的に質実剛健を旨とする武家文化といわれる。今も鎌倉・室町初期に建てられた多くの重要文化財や史跡が残されている。その代表的なものは鶴岡八幡宮や鎌倉大仏、鎌倉禅利五山として名高い建長寺・円覚寺・寿福寺・浄知寺・浄妙寺、駆け込み寺として有名な東慶寺等がある。又街の前面に開ける由比ヶ浜は絶好の海水浴場として知られ、シーズンには色とりどりのパラソル、咲きこぼれて近代的鎌倉風景を見せる。

鎌倉市勢

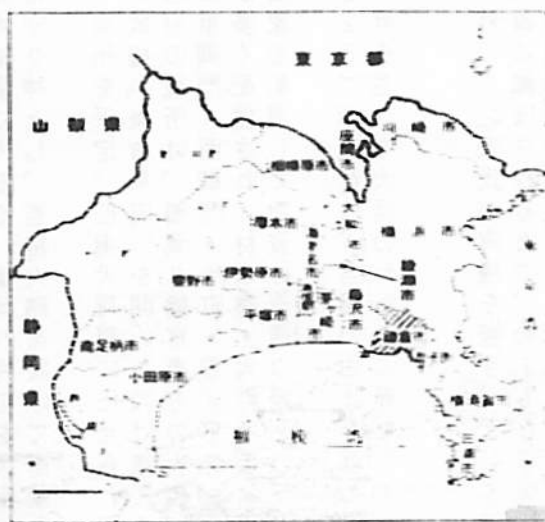
昭和14年11月市制施行、人口約17万3千人(54年版)面積39.53km²、東海道本線大船・横須賀線北鎌倉・鎌倉・江ノ島鎌倉観光電鉄鎌倉・長谷・極楽寺・七里ヶ浜などの各駅がある。

市域は県の南部、三浦半島の基部を占め、南東を逗子市、北は横浜市、西は藤沢市に接し、南は由比ヶ浜・七里ヶ浜で相

行して鎌倉市となり、同23年深沢村と大船町を編入して今日に及んでいる。

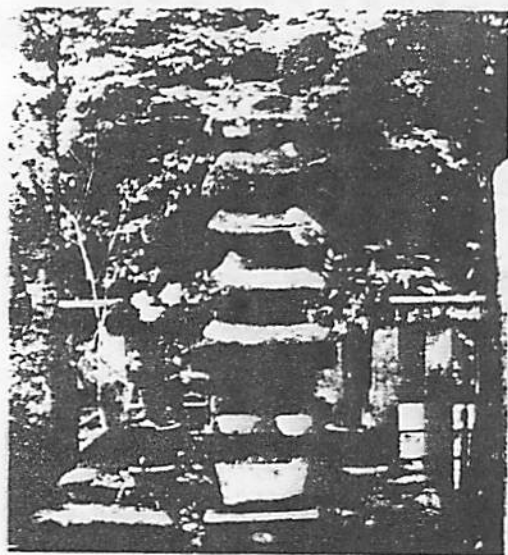
市内には150mを最高点とする100m前後の丘陵性山地が広く分布し、東南部・北・東・西の三方を山地に囲まれた溺れ谷の埋積低地に、中心市街地が形成されている。市街地の周囲には、やつやとなどと呼ばれる奥深い谷地がみられ、家並みのほぼ中央部を割って滑川が南へ流れる。市街地の南部には、由比ヶ浜の砂浜海岸が相模湾へ向つて開けている。

位置図



鎌倉の歴史

鎌倉の名が文献に出てくるのは、天平7年(735)の「相模国封戸租交易帳」に、鎌倉郷とあるのが最初である。「吾妻鏡」にも、由比郷、小林郷等の名が見える。



が、その範囲・沿革などは明らかではない。

康平6年(1063)、源頼義が鶴岡八幡宮を由比郷に勧請し、同義朝は亀ヶ谷に屋敷を構える等、平安末期には源氏の鎌倉進出が目立つが、治承4年(1180)頼朝が本拠をこの地に置くまでは、淋しい一豊漁村に留まつた

頼朝は、父祖の地鎌倉に入るや、鶴岡八幡宮を大臣山の麓へ移して源氏の守り神とし、若宮大路を設けて街割りを整えた。

平氏を滅ぼし、奥州を平定、征夷大將軍に任ぜられた頼朝が、最初に武家政權「鎌倉幕府」を開いたのは建久3年(1192)。幕府の役所は、鶴岡八幡宮東方の大蔵に設けられ、山の手の東御門・西御門・小町・雪ノ下あたりに諸武將の邸宅が多く配置され、材木座・大町・坂ノ下附近には、交易・商家を配置して物資の流通の場とし下町とした。

貞応2年(1223)源光行は、当時の由比ヶ浜の風景を「千万字の宅、軒を並べて大浜のわたりに異ならず」と伝えている。

頼朝の死後は、外の北条氏が実權を握り、元弘3年(1333)新田義貞に滅ぼされるまで、約110年間北条執權時代が続いた。頼朝が幕府を開いてから義貞の鎌倉攻めまでの約150年間で、鎌倉が最も繁栄した時代、いわゆる鎌倉が中心に日本の政治が動かされた鎌倉時代である。当時の鎌倉が、いかに壮麗で活気に溢れる都であったかは、古典の名著として知られる「十六夜日記」「東関記行」「海道記」などにも書き残されている。

室町時代には、関東管領と称して氏満・満兼・持氏等4代にわたる足利氏が鎌倉を治めた。禅宗五山などの寺の建

設が行なわれたりしたが、間もなく執事の上杉氏に勢威を奪われた。上杉氏も山内・扇谷の2派に分裂して抗争、鎌倉は争乱の巷と化した。

特に康正元年(1455)駿河の今川範忠が京都足利の命により鎌倉に侵入して神社・邸宅を焼き払い、管領の足利成氏が古河に走つてからは衰亡の一途を辿る、北条氏の興隆と共に**中心**は小田原に移りその繁栄を譲つた。

江戸時代には東海道藤沢宿の経済圏に属し、幕府の直轄地として代官所が置かれた。中期以後は將軍徳川家齊の鶴岡八幡宮の再建などがあつて、大社寺への参拝客が増えたが、町そのものは世間から忘れ去られた一農漁村に留まつた。

明治21年の横須賀線の開通、同23年江ノ島鎌倉電鉄の敷設、更に横須賀線の電化が大正14年に行なわれ、東京との距離が短縮されると、気候・風土に恵まれた避暑・避暑の別荘地として急速に発展した。特に第2次大戦後は京浜地区の衛星都市として、一般住宅地化し、宅地造成が著しく、市域北部の大船・深沢地区は、京浜工業地区の延長として工業地化が進展している。

昭和41年には、宅地化から古都の風致を守る為に、奈良・京都と計つて古都保存法を成立させた。又鎌倉には、「鎌倉文士」で総称される、作家・画家・工芸家・学者等鎌倉に在住する文化人も多い。

市内には9月の「流鏝馬」で知られる鶴岡八幡宮を始め長谷の大仏・鎌倉五山と呼ばれる建長寺・円覚寺・寿福寺・浄智寺・浄妙寺・源頼朝の墓等、鎌倉時代の神社・史跡が多く、四季内外の観光客の訪れが絶えない。夏は海水浴客で賑は、又云庵を誇る鎌倉彫も有名である。



北鎌倉



円覚寺

円覚寺 臨濟宗円覚寺派 山号瑞鹿山

市内山ノ内、北鎌倉駅から徒歩約2分、老杉がうつそうと茂り、鎌倉石の石段はすりへつて、如何にも歴史の重みと、禅の修行道場としての荘厳さをただよわせる。今は横須賀線が総門の前を通過しているが、元は線路もその前の県道も円覚寺境内で、県道の両端には、南外門・北外門が建ち、大名でも門内は駕籠や馬を下りなければならなかつた。

末寺210ヶ寺余りを統率する臨濟宗円覚寺派の総本山で、山号は瑞鹿山。弘安5年(1282)の創建で、北条時宗の開基、開山は宋の名僧無学祖元である。寺名は、寺の建立の際、地中から円覚経の入つた石櫃が出土した為に円覚寺と名付られたという。

鎌倉幕府の祈願所として寺運は隆盛し、南北朝期から室町初期にかけては関東管領足利氏の保護を受け、至徳年間(1384)87)鎌倉5山の第2位に列した。

応永年間(1394)1428)と、永禄年間(1558)70)数度の火災に遭い、やゝ寺運は衰えたが、近世に入り徳川幕府の外護により、諸堂宇を復興した。朱印144貫830文は、鎌倉で鶴岡八幡宮に次いで多い。

現在の諸堂宇は関東大震災以後建てられたものである。寺域は広大で約6万㎡、全域が国の史跡に指定されている。北鎌倉駅を降ると左手に数軒の飲食店が並び、その裏手に円覚寺への入口、白鷺池がある。白鷺の名は、寺の創建期、八幡大神が白鷺に化してこの地に舞い降りたという伝説に由来する。

白鷺池に架けられた「降魔橋」を渡り、横須賀線の線路を横切つて杉木立の中の石段を上り詰ると総門で、この左手奥に塔頭の桂昌庵・松嶺院、右手奥へ登つた所に江戸期建立の山門がある。

山門の右手、一段と高い山腹に帰源院、更にその上の丘陵上には鐘楼・弁天堂がある。鐘楼に懸けられた梵鐘は、正安3年(1301)北条貞時が物部国光に鑄造させたもので国宝の指定を受けている。

山門の奥、正面には昭和39年完成の鉄筋コンクリート造りの仏殿がある。その左手には遷仏場(江戸期建立)・禅子林・居士林などの諸堂宇がある。

仏殿の裏手には蔵六庵や勅使門・方丈と続き、方丈脇を進んだ左手に、「妙香池」がある。建武2年(1335)夢窓国師の築造と見られ、波浪の自然侵食に以せた石造りになつてゐる。

妙香池を中心とした仏殿背後の庭園や、前庭の白鷺池付近は、これらを囲む自然林を含めて国の名勝に指定されている。

妙香池の北側に正伝庵、東に一寸と登つた処に、開基北条時宗の廟所である仏日庵、その南の山腹に如意庵等の塔頭がある。

仏日庵の北側の唐門「万年門」を潜ると、左右に禅堂・禅道場等数棟の堂宇が建並び、その奥に国宝の舍利殿、舍利殿の背後に開山無学祖元の墓所である開山堂がある。

舍利殿は、鎌倉期の造営で、一見二階建の様に見えるが単層。桁行3間、梁間3間、入母屋造り、鱗葎、急勾配の屋根や鋭い軒の線、軒下の組物等に、鎌倉期に中国から伝わつた禅宗建築の形式を良く伝えている。寺内に現存する堂宇中最古のもので、かつては創建当初の建物と見られていたが、現在では、室町期、太平寺の仏殿を移築したものと考えられている。

舍利殿の東側の山腹には、続灯庵、それに南接して黄梅院等の塔頭が、杉木立の中に静かなたたづまいを見せている。

寺宝類も多く、国指定の重要文化財木造仏光国師坐像・銅造阿弥陀三尊像・絹本着色仏涅槃図。絹本着色鐘樓図、県指定文化財絹本着色五百羅漢図16幅・絹本着色十六羅漢図16幅・絹本着色仏鑑禪師像などがある。

仏光国師坐像は、開山堂に安置されており、像高約97cm、玉眼入り寄木造りの彩色像、鎌倉期の作。阿弥陀三尊像は、蓮弁形の大きな光背を三尊が背負う、いわゆる「善光寺式」と呼ばれるもので、文永8年(1271)鋳物師賀茂延時の作である。尚毎年11月初旬には、寺宝類の風入れがあつて一部の物が一般公開される。

白鷺池

総門前の池。今は当初の面影も無いが、創建当時の数少ない遺構。

三門

「円覚寺興聖禅寺」の額を掲げ、楼上には観音菩薩像、十六羅漢像などを安置。天明3年(1783)ころの建物近年修復する前までは、芦葺き。如何にも鎌倉期の寺という趣きをもつていた。

仏殿 (大光明宝殿)

本尊宝冠釈迦、梵天、帝釈天などを安置。大正12年の関東大震災で前の建物が倒壊したので、昭和38年再建。

遷仏場

仏殿左の建物。元禄12年(1699)のもの。元は僧

堂で、今の仏殿が出来るまでは、本尊を安置していた建物であつた。

銅鐘

仏殿の右脇の山上にある。正安3年(1301)北条貞時が物部国光に鑄造させた。中国高僧西間子曇が銘を撰し書体も素晴らしい。総高259cm。建長寺・常楽寺のものと共に鎌倉三名鐘の一つ。この鐘楼からの東慶寺等の眺めは抜群である。

鐔口

鐘楼に懸つている。天文9年(1540)鋳物師瀬戸永歙の作。この時代の鐔口は形式化され、平面的になり易いが、之は胴が膨み立体的な美しさを見せている。

帰源院

永和4年(1378)に示寂した第38世住持傑翁是英の塔所。北条氏康(後北条氏)が中興。明治27年夏目漱石がこゝで参禅し、小説「門」を書いた。漱石の句碑が建ち、毎年12年初旬の漱石忌には多くの人がこの寺に集う。又傑翁の師、之庵道貫の肖像画は、東京国立博物館に寄託中である。

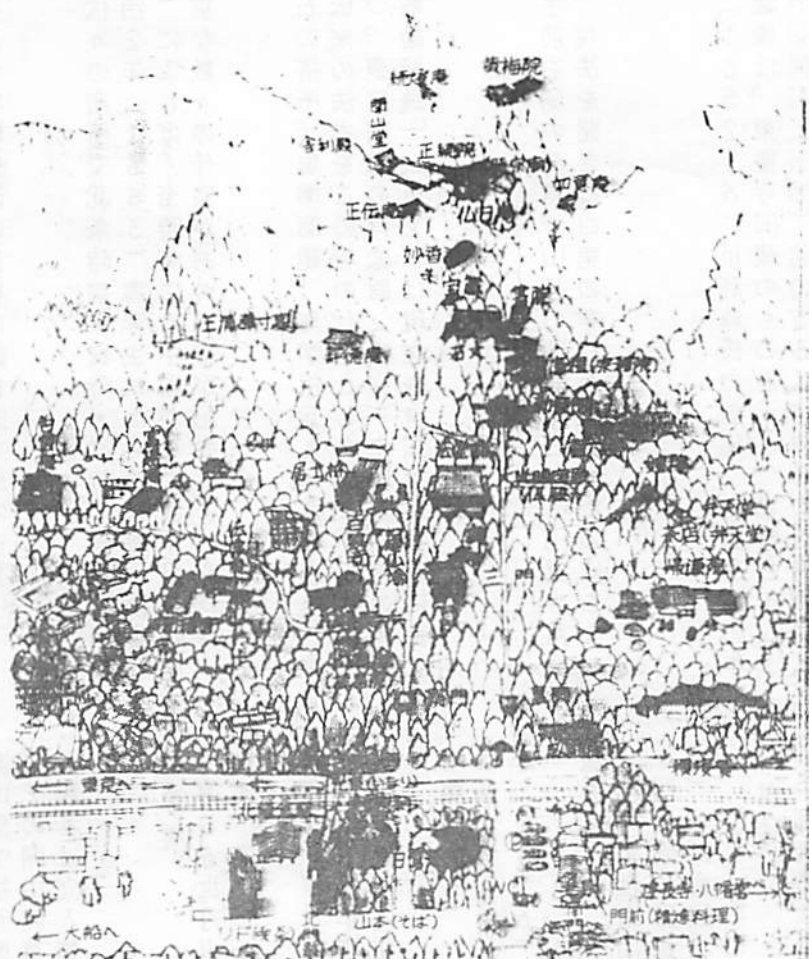
蔵六庵

臨済宗大休派の祖、中国宋の名僧大休正念の塔所。元寿福寺にあつたものをこゝに移したと云う。弘安元年(1278)、秦定居士の為に書いた大休正念法語(重文)は東京国立博物館に寄託中。

妙香池

創建当初の禅宗様の伽藍配置を忍ばせる池。方丈の左側にあり、池畔の岩は虎頭岩と呼ばれている。

円覚寺



円覚寺什宝

国宝

舍利殿・梵鐘

重文

木造仏光国師坐像・銅造阿弥陀三尊像（鎌倉国宝館寄託）・絹本着色仏呆般図・紙本淡彩鐘道図・絹本着色虚空蔵菩薩像・絹本着色仏光国師像・絹本着色被帽地藏菩薩像・紙本淡彩跋陀婆羅像・絹本淡彩羅漢図3幅・青磁香炉・朱漆机・紙本淡彩円覚寺境内絵図・紙本淡彩富田庄図・朱漆須弥壇・紙本墨北条時宗書状・紙本墨書祖元書状・紙本墨書円覚寺中用米注進状・紙本墨書円覚寺禁制・紙本墨書円覚寺制符・紙本墨書日仏庵公物目録・定額寺官符・大灯国師渴語・印文「無学」木印2顆

その他什器古文書類多数所蔵有。

正伝庵

第24世明岩正因の塔所。貞和4年(1348)万寿寺に創建されたものをここに移した。貞治4年(1365)に作られた明岩正因の頂相は鎌倉国宝館に寄託中。

仏日庵

北条氏代々の廟所で北条時宗・貞時・高時の肖像彫刻を安置。貞治2年(1363)書写された「仏日庵公物目録」(重文)によれば、当時寺には中国からの渡来品を始めとして貴重な数々の什宝があつた事が記されている。

横梅院

夢窓疎石の塔所。無準師範、無学祖元と伝えて来た、中国万寿寺伝来の法衣をこの寺の什宝としたので、伝衣山の山号をもつ。夢窓国師の肖像画(重文)や義堂周信の書いた「華嚴塔勸縁疏」(重文)は現在鎌倉国宝博物館に寄託中。

白鹿洞

横梅院手前右側の洞窟。山号の瑞鹿山とは、円覚寺落慶供養の時、説法を聞きに白鹿の群れが集まつたのにちなむと云う。

続登庵

文和年間(1352)足利尊氏の創建。鎌倉後期の本尊観音菩薩像は、東慶寺旧蔵のものとする。嘉暦2年(1327)夢窓疎石(国師)銘の有る仏心禅師の銅造骨壺(重文)等を蔵す。

舍利殿

禅宗様(唐様)最古の貴重な建造物。之まで円覚寺創建

当初の遺構と云われていたが、近年の研究に依り、当初の舍利殿は、永禄6年(1563)の大火で焼失、西御門にあつた尼寺五山の第1位大平寺の仏殿を室町時代に移築したものと云う説が有力。舍利殿の後ろは開山堂で開山無学祖元像(重文)を安置する。その後ろの山腹にはその開山の墓塔が(無縫塔)建つ。この一帯は一般参拝観者は立入禁止。門越しに舍利殿の麟葺き屋根が美しい。

寿徳庵

第66世月卓中圓の塔所。室町時代の武将三浦道寸が中興、道寸と一族の墓がある。

居士林

大正15年柳生家の剣道場を移築したもの、信徒の修行の場所に使われている。

富陽庵

第61世東岳文昱の塔所。開基は上杉朝宗。応永23年(1416)東岳和尚供養の宝匡印塔が建つ。

伝宗庵

第11世南山士雲の塔所。本堂と門を残すが、境内は今幼稚園。鎌倉時代特有の土紋を残す地藏菩薩坐像(重文)は鎌倉国宝博物館に寄託中。

白雲庵

中国元時代の高僧第10世東明慧日の塔所。元応元年(1319)の創建。所蔵の東明禅師坐像(重文)は南北朝時代作の頂相(禅宗の肖像彫刻)、又本庵安置の本尊宝冠釈迦如来像は、元禄13年(1700)の胎内銘札をもつ。

東慶寺

東慶寺 臨濟宗円覚寺派 山号松岡山

円覚寺の南、横須賀線を隔てた山腹にあり、東側の丘を隔て、浄智寺と境を接して隣り合っている。元尼寺で、「縁切寺」も「駈込寺」等とも称された。

山号は松岡山。弘安年間（1278〜88）北条貞時の創建で、開山は覚山志道尼と伝える臨濟宗円覚寺派の寺。覚山尼は安達義景の女で、貞時の父時宗の夫人。「縁切り寺法」を作つたのは覚山尼と云う。

後醍醐天皇の皇女用堂尼が、5世住職になつてから、比丘尼御門跡紫衣寺となり、土地の名を取り「松ヶ岡御所」とも称した。以来歴代住職は名門の息女が勤める事が多かった。

20世天秀法泰尼は、豊臣秀頼の側室の女で、天樹院千姫の外護により、寺法を徳川幕府に、再確認させ、寺の勢力は絶頂に達した。寺領112貫文を有したが、これは鎌倉にあつては鶴岡八幡宮・円覚寺に次いで多く、建長寺の上にある。住職の江戸登城の際には、金紋先払いであつて大名も道を譲つた。

寺法が大いに利用されたのも江戸時代で、川柳の種にもなり、寺には今も当時の離縁状や関係古文書が多数保存されている。当時は女性の方から離縁を申し立てると云う事は、以ての他の事、女性は一度嫁せば、生涯夫に仕えるのが妻の勤め、と現代では考えられぬ様な時代があつた。

然しその様な時代にご、東慶寺には、駈け込んでる年間尼としての勤めを勤め上げれば、自由の身となれると云う「縁切り寺法」があり、これは明治6年まで続いたと云う

明治以後寺法は廃止され、同36年、暁道古川慧訓師が入山してから、僧寺となつた。

寺域は約1万㎡、堂宇は本堂・庫裏・客殿・水月堂・寒雲亭などを備える。仏殿は横浜市の三溪園に移され、梅林の奥に堂跡を白く残している。

寺宝としては、国指定の重要文化財財木造聖観音立像（鎌倉期作）、県指定文化財木造水月観音半跏像他、天秀法泰尼・天樹院時代の華麗な文化を物語る蒔絵初音歌絵火取母（重要美術品）、葡萄酒絵オスチャ容器（重要美術品）等、数十点の蒔絵が収蔵されている。

又早春の梅に始まる花の寺としても有名である。急な階段を上り、茅葺きの山門を潜ると、すつぱりと山懐に包まれた庭が広がる。

所狭ましと林立するのが紅梅、白梅。一斉に開花するころともなると、梅の香りが境内をはみださんばかりになる。彼岸桜、シヤガ、萩、あじさい、木犀、四季を通して花の絶える事がない。

水に写る月を見て、冥想にふけると云う水月観音、柔かさをたゝえる顔の表情を持つ聖観音立像のもとに、追手に追われ、息をはずませて門前にたどり付いた馳込者の安堵の気持と、あまりにも忙しい現代から逃れて、広い東慶寺の境内にたゝずむ気持には何か共通点がある様な気がする。

又境内の墓地には文化人の墓の多い事でも有名である。梅林の奥、右手の山腹には覚山尼と用堂尼五輪塔、天秀尼の大きな墓石を始め歴代住職の墓が並び、左手の墓地には田村俊子・真杉静枝・佐々木ふさ等の女流文士、和辻哲郎・安倍能成・西田幾太郎等哲学者の墓がある。境内右手から西へ50m程石段を登つた丘陵上南側には、鈴木大拙氏の松岡文庫等もある。

縁切寺法

鎌倉時代には、女性は一端結婚すると、以後如何なる理由があつても自分から離婚を求める事が出来なかつた。その為、思案に余つて自殺する者まであつたと云うから、今から考えれば全く嘘の様な事実である。

そこで東慶寺の覚山尼は、何とかこうゆう女性を救おうと考へ、その特別の権限を東慶寺に与えて欲しいと、我が子北条貞時に頼んだ。そうして出来たのが、所謂「縁切寺法」である。

この法は、離婚希望者が東慶寺に入り、一定の期間を寺の規則に従つて過ごせば、その望みを果たす事が出来ると云うものである。この寺法は、明治になつて廃止されるまで、代々受け継がれて来たが、後には離婚の為だけで無く人生的悩みを持つた女性なども、この寺に駆込んで来たと言われる。

東慶寺が「駆込み寺」とか「縁切り寺」とか呼ばれるのは、こうした事から生れたものである。

梵鐘

三門内の左側の鐘樓に懸る。観応元年（1350）物部光連の鋳造。元は材木座補陀洛寺の鐘。東慶寺の鐘は今は伊豆韭山の本立寺にある。

聖観音立像

鎌倉時代の作。衣文に土紋裝飾を施す。女性的で中国宋朝風の影響を受けた彫像。元尼五山の第1位太平寺にあつた像と云う。

水月観音像（重要美術品）

水に映る月影も眺めて沈思黙考する姿が美しい像。（南北時代の作）

初音火取母（重文） 桃山時代作

螺田蒔絵の聖餅箱（ヤソ教のローマ字印あり）

他数十点の漆芸品所蔵



東慶寺蔵聖観音立像

浄智寺

浄智寺 臨濟宗円覚寺派 山号金峰山

山号は金峰山。臨濟宗円覚寺派の寺で、弘安6年(1283)北条宗政・師時父子の創建、開山は宋の名僧元庵普寧、請待開山大体正念、準開山南州宏海と伝えられている。夢窓疎石・青拙正澄等の住職歴住す。

南北朝期には鎌倉五山の第4位に列し、寺運は隆盛、鏡堂覚円・太平妙準・古先印元・青山慈水等高僧の入山が伝えられる。

最盛期には塔堂11院を数えたと云うが、今は「曇華殿」と呼ばれる本堂と総門・山門など、大正の関東大震災以後建てられた新しい建物があるのみである。

境内も広くはないが、曇華殿の背後は低木林で丘陵地へ続き、庭前には、ビヤクシンの古木が茂つて、緑の多い、静かなたゞ住いを見せている。総門から続く100m程の杉並木の参道沿いには、僅かではあるが、禅寺の面影も残っている。

総門の脇にある井戸は、「鎌倉十井」の一ツ「甘露ノ井」である。水は鎌倉五名水の一つである。境内地全域が国の史跡指定を受けている。

寺宝としては、国指定重要文化財の木造地藏菩薩結跏趺坐像・紙本墨書西来庵修造勸進状・元庵普寧木像・韋駄天木像などがある。

地藏菩薩像は、鎌倉期作・勸進状は永正年間(1504-1521)玉隠の筆になるものである。

甘露ノ井

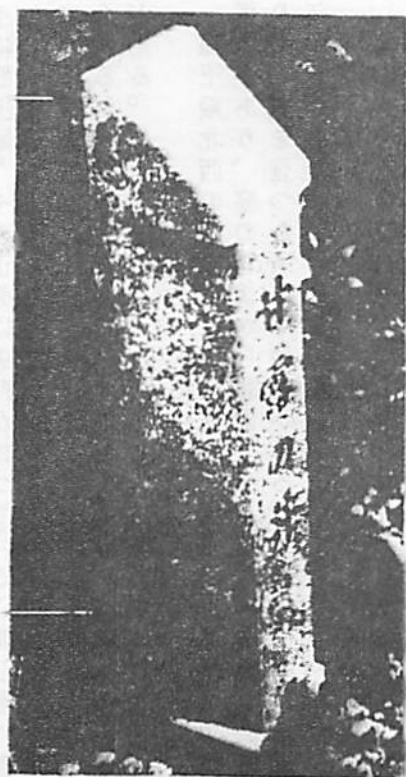
総門前の弓なりの石橋の脇にある。鎌倉十井の一ツで、水は鎌倉五名水の一ツである。

三世仏坐像

曇華殿の額を掲げた仏殿内に安置。鎌倉後期の作。過去・現在・未來を表わす阿弥陀如来・釈迦如来・弥勒菩薩は袖と裾を台座に垂らす中国宋風の彫刻。ほかに南北朝時代作の地藏菩薩(重文)(国宝館寄託)、大体正念(市文)達磨大師像、観音菩薩像などの仏像や肖像彫刻がある。銅鐘(県重要文化財)暦応2年(1340)銘がある、福岡県浄土院の鐘で地方の鋳物師の鋳造。篤志家の奉納によるものと云われる。

沙羅双樹

お釈迦様は、誕生・成道・入滅の時、何時もこの樹の下にあつたと云われ、沙羅双樹は釈迦のシンボルとされる。又コウヤ楨の木等数々の珍しい樹木・草花が境内を埋め尽くしている。



建長寺

建長寺 臨濟宗建長寺派 山号巨福山

500余の末寺をもつ臨濟宗建長寺派の本山。建長5年(1253)北条時頼が祈願所として建立し、年号に因んで寺号を付けた。開山は宋の帰化僧蘭溪道隆(大覚禪師)・応行の作と伝える5m余の地藏菩薩坐像を本尊とする。

永仁元年(1293)・正和4年(1315)と2度の火災に遭つたが、その都度執権北条氏の手により再建され、至徳3年(1386)には、鎌倉五山の第1位に列した。七堂伽藍、49院を備えて寺運は隆盛したが、応永21年(1414)の失火で全山灰尽に帰し、以後衰えた。

天正19年(1591)徳川家康が寺領95貫840文余を寄せたが、これは鎌倉では鶴岡八幡宮・円覚寺・東慶寺に次いで4番目に大きなものである。

現在の諸堂宇は、江戸時代以後建てられたものが多いがその配置は創建当時とほとんど変りがなく、宋朝風禪寺の様式をうかがう事が出来る。

総門を入つて約70mのところ、山門、その右手に鐘楼があり、建長7年(1235)北条時頼が物部重光に鑄造さす梵鐘(国宝)が釣り下げられている。

山門を潜ると正面が本尊を安置する仏殿で、前栽の柏楨の古木は市指定の天然記念仏。蘭溪道隆が植えたものう云う。

仏殿の背後には法堂、庫裏・紫雲閣と続き、紫雲閣の左

手に龍王殿、その正面に唐門が建っている。龍王殿の裏手がある。国指定の史跡・名勝で、蘭溪道隆の作庭と伝える庭園である。実際には江戸期の造作か、改修によるものとの説もあるが、心字池を囲む庭園のたゞずまいは雅趣深いものがある。

龍王殿北西の山腹には、宝珠院・竜峰院・天源院などの塔頭があり、庭の背後から北東方へ300m余り、爪先上りの山道を登つた所に半蔵坊がある。宝珠院には、大正8年から12年まで、作家の葛西善蔵が止宿していた。

又山門を入つて右手の嵩山門を潜り、東南へ約80m行つた丘陵中に、僧堂・大徹堂等があり、その奥まつた所に蘭溪道隆の塔所、西来庵昭堂が建っている。西来庵の前には茶人織田有楽斎の墓と伝える石造五輪塔、裏手の突当り山腹には、蘭溪道隆と無学祖元(仏光国師)の墓である石造無縫塔が2基並んでいる。内道隆のものは鎌倉期のもので、国の重要文化財指定を受けている。

諸堂宇中、宝暦5年(1755)造営の山門、文化11年(1814)に建立された法堂が県指定の重要文化財で唐門・仏殿・西来庵昭堂が国指定の重要文化財、仏殿は寛永年間(1624〜43)久能山に建てられた(静岡県)徳川家の霊廟の拝殿を、沢庵禪師の努力でもらい受け、正保3年(1646)に移築したもの。桁行3間、梁間3間銅板葺き、一重も腰付き、寄棟造り、瓦棒銅葺。江戸初期の華やかな装飾性が特色である。

唐門も仏殿と同じく久能山から移されたもので、桁行1間、梁間1間、銅板葺き。

西来庵昭堂は、長禄2年(1458)の造営で、当寺では最も古い建物。桁行5間、梁間5間、一重寄棟造り、茅葺き。堂内に蘭溪道隆の木像が安置されている。

尚、総門と龍王門は、京都般舟三昧院から移建したものである。

寺宝類も多く、国宝の絹本淡彩蘭溪道隆像や大覚禪師墨蹟・法語規則を始め、国の重要文化財脂定を受けている木造北条時頼坐像・絹本着色釈迦三尊像・絹本淡彩十六羅漢像・絹本墨画三十三観音像等が伝えられている。

蘭溪道隆像は、禪師が58歳の時の肖像画で、文永8年(1271)の自賛である北条時頼坐像は、上杉重房像と共に興禅寺に伝うられていたもので、寄木造・玉眼入り、鎌倉期の作。十六羅漢像は、明兆(1352)1432の筆である。

総門

巨福門とも云い寧一山筆と伝えられる「巨福山」の額を掲げる。天明3年(1783)に建立された京都般舟三昧院のものを昭和18年に移築。

三門 県重文

後深草天皇辰筆の「建長興国禅寺」の額を掲げる。安永4年(1775)の再建。重層の門で2階には宝冠釈迦如来像、銅造五百羅漢像等を安置。但し内部の拝観は許されない。

仏殿 重文

本尊地藏菩薩・伽藍神・祖師像・千体地藏・千手観音像等を安置。建物は正保4年(1647)建立の江戸芝増上寺の霊屋を譲り受けたもの。

法堂 県重文

住職が説法をする建物。内部には法座が設けられ、儀式

も行なわれる様になつてゐる。現在の建物は文化11年(1844)建立のもの。千手観音を安置。「天下禅林」の額を掲げる。

方丈 (龍王殿)

宝冠釈迦如来像を安置。総門と同じく京都般舟三昧院から移築、檀信徒の法要などに使われている。

庭園 史跡

寺伝では夢窓国師の作庭と云う。心字池を中心とした禅の庭園。現在のものは、江戸時代初期に改修されたものとの説である。

唐門 (勅使門) 重文

唐門とは屋根が唐破風になつてゐる門の意。江戸時代初期の建造。近年まで麟葺の屋根。今は銅板葺き。

西来院

開山大覚禪師(蘭溪道隆)の塔所。成立は弘安元年の(1278)ころ。昭堂(重文)・開山堂・食堂・坐禅堂がある。昭堂は長禄2年(1458)創建と伝えられる。外観は簡素な建物であるが、内部は高い柱で空間が造られ禅宗様仏殿としての荘厳さをもつ。

堂後には開山像を祭る祠堂。山上には蘭溪道隆の墓(重文)と無学祖元の墓(無縫塔)がある。この一帯は修行道場の為一般拝観者は立入禁止。

伝織田有楽斎の墓

西来院を抜けた右手の墓地にある。織田有楽斎は信長の弟。茶道を千利休に学び有楽流の元祖。しかし墓碑銘によると有楽斎の孫織田長好のものである。

梵鐘重文

三門に向つて右手にある鐘樓に懸けてある。建長7年(1255)北条時頼が物部重光に鑄造させたもの。開山蘭溪道隆が銘文を撰している。建長寺創建当時の数少い貴重な遺品の一つである。

柏 榎 史跡

仏殿前に古木7本と若木1株がある。創建当初のもので開山蘭溪道隆お手植えのものと云われる。原産地は中国。

河村瑞賢墓

半僧坊へ行く道の途中左側にある。瑞賢は江戸時代初期の土木・海運事業家。淀川を始めとする治水工事や、江戸と陸奥・出羽間の開航など、多くの事業を残し旗本に列せられている。建長寺裏に別荘があつたと云う。

半僧坊

天園ハイキングコースに登る途中の山腹に建つ。建長寺の鎮守、半僧権現を祭る。明治23年静岡県奥浜名の方広寺から勧請。

宝珠院

塔頭の一つ。35世了堂素安の塔所。

竜峰院

15世約翁徳儉の塔所。

天源院

13世南浦紹明の塔所。

回春院

20世玉山徳施の塔所。

正統院

14世高峰頭日の塔所。

などの諸塔頭が寺内にある。

建長寺什宝

国宝 鎌倉国宝館寄託中

梵鐘・大覚禪師墨跡法語規則・絹本淡彩蘭溪道隆像

重文

木造北条時頼像(鎌倉国宝館寄託)・仏殿・西来庵昭堂唐門・大覚禪師塔・絹本着色釈迦三尊像・絹本淡彩十六羅漢図8幅・絹本墨画三十三観音像32幅・紙本墨画喜江禅師像・絹本着色大覚禪師像・休漆須弥檀・紙本墨画西来庵修造勸進状・紙本墨画和漢年代記2冊・大覚禪師墨跡3幅・大覚禪師像・金剛般若経等々



北条時頼像(明月院蔵)

鎌倉幕府 百五十年の歴史

幕府成立はいづか？

鎌倉時代とは武家政権の政庁が鎌倉に置かれた時代の総称である。

この武家政権の政庁とは、いうまでもなく源頼朝が創始した鎌倉幕府であるが、その幕府の成立時期をいずれの時点に求めるかについては、種々の議論があり、必ずしも一定しない。しかし、幕府を単純に武家政治の政庁と解し、その出発点を源頼朝の家政機関に求めるならば、伊豆に挙兵した頼朝が一たん石橋山合戦に敗れて安房に逃れたのち、上総・下総・武蔵を経略して、やがて鎌倉に入り、そこを本拠地と定めた治承四年（一一八〇）七月のこととしてよいと思う。

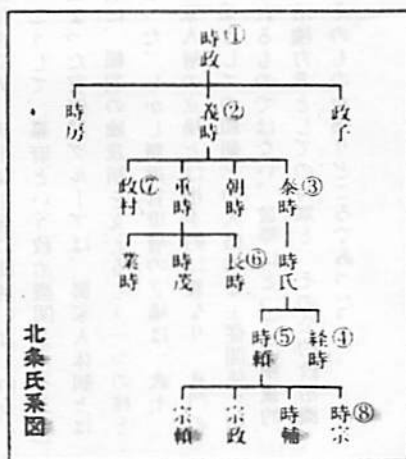
もちろんそれは、頼朝をはじめとする諸国源氏の挙兵——反平氏政権の立場にたつ武力蜂起——によって始まる治承・文治の内乱が、これから熾烈化しようとする時期であり、幕府が武家政権として安定するには、まだほど遠い頃ではあるが、とにかく後の鎌倉幕府のもととなる頼朝の政庁（家政機関の基礎は、鎌倉を本拠と定め、そこに居館を営んだとき）に成立したものとしなければならぬ。

その後、平氏討滅のための戦いを続ける中で、頼朝の政権は次第に基礎をかため、寿永二年（一一八三）十月には、後白河法皇より頼朝の東国沙汰権が認められ、元暦二年（一一八五）三月、平氏を西海に族滅させたのち、その年の十一月には諸国守護地頭の補任権が勅許される。そして、文治五年（一一八九）に奥州を平定して、ほぼ内乱に終止符をうった頼朝は、翌建久元年（一一九〇）上洛して法皇と対面し、このとき頼朝は日本国総追捕使・総地頭の地位を確認され、国家的な軍事・警察の担当者となった。いわゆる「天下兵馬の權」を、国家公権から委譲されたのである。

こうして鎌倉幕府は武家政治の政庁として公的な存在となったが、その鎌倉幕府の主である頼朝は「鎌倉殿」としてその家人を率い、諸国を守護する公的責務を持つこととなる。ついで、建久三年（一一九二）に頼朝が征夷大将軍に任ぜられたところから、この「鎌倉殿」の地位にあるものが、「將軍」と呼ばれることとなった。

そしてこの鎌倉政権は、頼朝の死後、執権北条氏による政治運営が続き、いわゆる執権政治体制が生まれ、北条泰時・時頼らの「善政」により、政権の安定期を現出する。この北条氏に幕府の実権が移って以後、鎌倉政権をよくくに北条政権とも呼んでいる。

やがて、この北条政権は、執権政治から得た宗（北条一門の家督）の専制政治へと、その



代数	氏名	就任年月
1	時政	建仁三（一一一三）・三・九
2	義時	元久二（一一〇五）・四・七
3	泰時	元仁一（一一二四）・六
4	経時	仁治三（一一四二）・六
5	時頼	寛元四（一一四六）・三
6	長時	康元一（一一五六）・十一
7	政村	文永一（一一六四）・八
8	時宗	文永五（一一六八）・三
9	貞時	弘安七（一二八四）・四
10	師時	正安三（一二三〇）・一・八
11	宗宣	応長一（一一三一）・一・十
12	照時	正和一一（一一三一）・二・六
13	基時	正和四（一一三一）・五・七
14	高時	正和五（一一三一）・六・七
15	貞頼	嘉暦一一（一一三一）・六・三
16	守時	嘉暦二（一一三一）・七・一

政治体制を変化させ、さらに内管領を中心とする得宗の被官たちによる政治の実権の掌握へと進むが、ついに元弘三年（一一三三）五月、後醍醐天皇の討幕計画に応じた新田義貞の鎌倉攻めによって、その政権の歴史に終止符をうつ。

したがって、鎌倉幕府政治は、約五十年の命脈を保ったこととなる。そしてこの約一世紀半の時代を一般に鎌倉時代と呼ぶが、それは要するに、武士階級の成長と政治的抬頭の時代であり、したがって武士Ⅱ在地領主を基礎とする封建的社会体制の成立の時代であり、またそうした社会経済の進展を背景に、独特の思想・文化が生まれた時代でもあった。

頼朝の独裁政治を支えたもの

鎌倉幕府の内部で、頼朝は完全な独裁政治を行ったが、その独裁制を支えたのは彼の「武家の棟梁」としての地位であった。彼は棟梁としての権威をもって、東国の在地領主（武士）との間に主従制的関係をつくり上げ、彼らを政権の武力的基礎とし、やがてその主従制を全国的に拡大していったのである。

したがって、鎌倉政権を支えていたものは、究極的には、頼朝のもとに服属してきた地方の在地武士たちであったといえよう。彼らはそれぞれの本拠地に所領（本領・根本私領）を有し、附近一帯の農民に支配を及ぼした領主である。彼等の所領支配は、律令体制下では必ずしも合法的ではなかったが、十二世紀後

半期には、すでに現実にならした私的支配を展開していたのである。そして頼朝が果した最も重要なことは、これら各地の在地領主たちの実際上の所領支配を、地頭補任権その他朝廷から公認された頼朝の諸権限を基礎として、合法化（公的承認）したことであった。しかも頼朝と地方武士Ⅱ在地領主との間には、それぞれの所領支配の承認を条件として、主従の関係が成立した。当時、そうした所領支配の承認・保証のことを本領安堵といったが、在地領主は本領を安堵されて、頼朝の従者すなわち家人となり、頼朝は彼等に奉公の義務を要求し、戦時における軍役ばかりでなく、平時には一定の御家人役や関東公事（貢租）を課した。こうして頼朝は、その家人たちが在地領主の支配下の土地・農民に対し、間接的な支配を及ぼす体制を確立しようと意図したのであった。

そのため、頼朝はその政権の支配下に、より多くの在地領主を集めることに努力し、それによって彼の政権の支配圏が拡大することを目指した。こうして獲得された頼朝の家人は、「鎌倉殿の御家人」「関東御家人」などと呼ばれて、鎌倉武士社会では、特別な身分的待遇を受けたが、幕府の主権者たる將軍頼朝が、この御家人たちを主従関係と、所領の恩給関係のもとに組織統制した体制を一般に御家人制とよんでいる。そしてこの御家人制が鎌倉幕府の支配の基本となっていたのである。

東国武士を中心とする御家人たちにとって

は、所領保全こそが最大の関心事であり、そのためには、頼朝という人格に対する個人的信頼にもとづく、私的な結合・従属が重視された。

一方、政權がその体制を整え、その支配を全国的規模に拡大するとき、そこには公的な政治機関が必要である。頼朝は公家の政治を模倣して家政機関を設けたが、政權の確立とともにそれを公式の政治機関として整備し、幕府という体裁を作り上げた。そして幕府を中心として、官僚的な側近職員を育て、これを独裁政治の補佐役とし、また全国的支配を展開する上での、公的政治の運営上の事務官僚とした。

京都から迎えた大江広元・三善康信・中原親能らは、そうした官僚的側近職員の前代表であるが、彼等は幕府の政治体制が次第に整備するにともない、また内乱が終結し平和が現出することによって、幕府内部での政治上の地位を高め、武士領主層に優越しはしめる。

こうして、幕府という政治機関と、そこに集まった官僚層グループは、御家人体制とは別に、頼朝の独裁制を支えるもう一つの柱となった。しかし側近官僚層の立場は、武士御家人層の立場とは根本的に異なり、武門の棟梁としての頼朝との人格的な主従関係で結ばれるものではない。彼等にとつては独裁的政治権力者としての將軍と、その公的政治機関そのものが握りどころであった。

貴族意識もつた頼朝の矛盾

頼朝の武家政権を構成する人々は、このよつに武士に在地領主層と側近官僚層とに分けられるが、両者の基本的立場の相異からくる対立と、それが政治運営上に見せる矛盾とは、政権成立の初めから明らかであった。鎌倉政権がその体制をかためるにしたがい、多くの問題や対立的要素が明確化する。

しかし、鎌倉政権の政治機関における構成員の間の対立とか、施政上に容易に露呈するような矛盾は、実は表面的なものにすぎず、その背後には、この政権のもつより基本的な矛盾があった。すなわち頼朝が武家政権の首長となったこと自体が内包する矛盾である。

鎌倉政権成立の歴史的必然性からみても、この政権は、武士階級の利害を代表するところの武士階級自身の政権たるべきところに、その本質を求めねばならない。こうした政権の成立は、頼朝に協調し、加勢した東国の豪族の在地領主層の古代政権への抵抗の歩みの一つの帰結として指向されたはずのものであった。

ところが、その東国の豪族の武士たちが棟梁として仰いだ頼朝は、自ら清和源氏の嫡流たることを主唱し、多分に古代貴族的性格の貴種性をもち、また貴族社会における權威をそのまま肯定する立場をとっていた。公武両

政権の間の、政治的接衝における頼朝の態度のすべてが、これを実証している。

したがって頼朝の立場そのものが、貴族的支配を排除せんとする東国武士たちの立場と相容れないところがあった。しかし当時の政治的・社会的情勢は、古代を完全に脱却するために、多くの未熟さを残しており、そこでは歴史の進展の過渡期における妥協が働き、頼朝を新政府の首長に押し上げざるを得ない情況と条件とが存在したのであった。新しい武家政権の樹立にも、むしろ貴種性をもつ武家の棟梁の權威が必要であったのである。そのような妥協が、歴史の進展の未熟さの必然の結果であることは承認しなければならぬが、その妥協が創立期の武家政権に不可避的な矛盾を内包させる結果となったことも、歴史事実として肯定しなければならない。この矛盾が、まず武士領主層と側近官僚層との、対立・矛盾として表面化し、さらには御家人層の内部での対立すら招いたのであった。

この矛盾の克服が、独裁者頼朝には到底不可能であったが、正治元年（一一九九）正月の頼朝の急死によって、矛盾に満ちた政権をそのまま受け継いだ二代將軍頼家の悲劇的生涯は、まさにその諸矛盾の激化の必然的成り行きであった。若い將軍頼家のもとで、政権内部は矛盾の克服をめざし、大きく変化しはじめ、やがて北条執権政治へと傾くのである。

北条執権政治を分類すれば

約百五十年の鎌倉政権の歴史のうち、源頼朝が独裁的な政治を行ったのは、いうまでもなく彼が死去した正治元年（一一九九）正月までの、十八ヶ年と二ヶ月の間にすぎず、彼の死後は、広い意味での北条氏執権体制が展開するのである。すなわち鎌倉武家政治の大半、実に百三十余年の間は、北条氏による執権政治の時代であった。

しかし、広い意味での執権政治といっても、同じ政治体制が続くはずはない。一般には、この北条氏による執権政治が始まってから以後の鎌倉政権を、一括して北条政権と呼ぶこともあるが、その北条政権は、政治体制の上から見れば、それぞれ特徴的政治形態をもつ、いくつかの時期に分けられるのである。すなわち、北条氏による執権政治の時代は、大きく時代区分をするならば、(1)執権体制の形成期、(2)執権政治の成熟期、(3)執権政治の変質期（得宗専制の時代）、(4)執権政治（幕府政治）の衰退・滅亡期、の四つの時代に分類しなければならぬ。

この北条執権については、『將軍執権次第』という書物があり、『群書類従』の巻四十八に収められているが、それによると、北条執権は、初代の時政にはじまり、最後の北条守時

に至るまで、十六代をかぞえる。時政の時代を執権政治と見るべきか否かは、若干の疑問を残すところであるが、この「執権次第」に示された執権の就任順序については、他の史料に徴してもほとんど誤りがなく、またこの書物の成立が、大体のところ鎌倉幕府滅亡の直後と推定されるので、現在では、むしろ執権についての基本史料とされている。

そして、この「執権次第」に即して、右に述べた執権政治の時代区分を考えるならば、第(1)期は、北条時政と次の義時の時代、第(2)期は三代泰時から五代時頼までの時代、第(3)期は、六代長時から八代時宗・九代貞時の時代、そして十代師時以後が第(4)期となる。いうまでもなく、こうした区別は、解釈の仕方によって若干されることもあり、またそれぞれの時代の間に、いわゆる過渡期を考えねばならない。しかし、ごく大まかにいえば、北条執権の時代は、右のように区分すべきであろう。また、この時代区別を、見分るようには、「執権政治」を狭義に言えば、右の区分のうち第(1)・(2)の時代こそが、それに該当するのである。

「執権」とは何か……

ところで、この執権という用語は、本来の意味からいふならば、「政権を握る」の意であり、またその人を指す。それが鎌倉幕府では

將軍を補佐し、政務を統へる重要な役職の名称として固定したのである。

日本の歴史の上では、すでに朝廷の記録所におかれた職員である弁の別称として用い、また院庁の別当をも執権と称することがあった。周知のごとく、鎌倉幕府では、はじめ大江広元が政所別当となつたが、院庁の場合に準じて、これを執権と称したらしい。この政所別当は、のち実朝の時代になって北条時政がこの職についたため、一人となつたが、その政治的権勢をもつて、幕府政治の実権を握りつゝあつた時政を、もっぱら執権と見るようになったのも当然であろう。

やがて時政の子北条義時は、建保元年(一一三二)に、侍所別当和田義盛を滅し(和田合戦)たのち、政所別当に加えて侍所別当の職をも兼ねることとなり、以後、この両職を兼ねるものが執権職であるとの体制が定まり、執権は幕府で最も権威ある職となつた。

なお鎌倉幕府では、執権を執事と呼ぶこともあり、また後見職・探題職・理非決断職などとも称した。これらの用語からも、執権のもつ重要な職掌が理解されるであろう。また鎌倉幕府の正式の命令書たる「関東下知状」や「関東御教書」には、執権の署名が載せられる。為政者としての執権が、政治の形式上において、重職であつたことが知られよう。関東下知状や関東御教書における執権の署名には、のちに泰時の時代になって、もう

人の人物の署名が加えられ、通常は、その別署という形式となる。この執権の署名に並べて署名する人物が、執権の補佐役たる職務をもつところの「連署」にはかならない。一般に執権・連署というが、「連署」の名は、公文書に連署するところから起つたものである。

そして、執権にその補佐役たる連署を置く必要が生まれたこと自体に執権が単なる將軍の補佐役ではなく、むしろ政治上の実権者として、幕政上に指導的責任をもつ存在へと変化してきた事実が示されているといえよう。

合議制政治への評価

さて上述の狭義の執権政治についていえば、そこに特徴的に見られるのは、政治上の合議体制である。はじめ、頼朝の死の直後、北条時政を中心とする有力御家人十三名の合議制が採用された。次の義時の時代には、御家人の統制、幕府体制の強化の必要から、執権の独裁的性格が強められたが、やがて承久三年(一一三二)に勃発した承久の乱の勝利によって、武家政権の優位を決定づけたのちの泰時の時代には、連署を置き、さらに評定衆の制を定めて、執権を中心としながらも、評定衆の合議によって政務を処理するという、合議制を確立したのである。この合議制の採用・確立は、貞永元年(一一三二)に成文化され

「關東御成敗式目」・貞永式目と合わせて、武家社会における道理の實踐及び定立と解され、北条執権政治を特徴づける二本の柱といわれている。

こうして泰時から時頼に至る間、いわゆる「善政」をたなわね、執権政治の最盛期を現出する。しかし、このような執権政治が、歴史の進展の上で、どのような歴史的役割を果たしたか、進歩的役割をもった政治体制であるか否か、という点については、現在のところその評価はまちまちであるというのが実情であろう。

たとえば、執権政治が御家人層の権利保護を基本としていることを指摘し、武士・御家人層の成長と封建社会の進展の上に、大きな意味をもつとする説がある一方で、執権政治が進歩的役割を果たしたのは承久の乱までであつて、それ以後はむしろ御家人層の成長を妨げる側面をもつようになる」と、その時代的限定を含めての限界説を主張する立場もある。また執権政治の歴史的意義を高く評価しながらも、その合議体制については、「執権の専制に対する有力御家人の反発を緩和するために必要となつた政策にすぎない」と、これを消極的に理解する説などもある。

私は基本的には、前者の積極的意義を認める立場に荷担したい。

「得宗専制」への移行

狭義での執権政治は、その基本的性質の一つである合議体制が、その実質を失う時点において崩壊する。執権という地位・役職は存在するが、政治的実権者としての内実は失われ、執権職そのものに幕府政治権力が伴うという状態は消滅した。

すなわち先に挙げた北条政權の四つの時代区分のうち、第(3)の時代に入るのである。その時代への移行を執権時頼の時代の末期に見るか、あるいは執権時宗の時代に見るか、などについても諸論があり、また紛わしいまでの問題もあるが、いずれにしても、やがて執権政治体制が、得宗専制政治体制へと変化したことは事実である。

もともと、執権の地位につくものは、北条一門の中でも、その嫡流家の家督たるものであることを原則とする。この家督が幼少のときなどに、その代理の意味で、一門の中の實力者が、時執権職につき、その原則から外れたこともあつたが、原則としては終始変らなかつた。そして、この原則は、北条泰時が家督を継ぎ、執権に就任したころに定められたのである。

当時、この北条嫡流家の家督を、得宗と呼んだが、時宗や貞時の時代になると、明らか

に政治権力が、この得宗の地位そのものに集中している状態が見られる。北条時頼の生存中に、すでにその曙光が認められるが、一般御家人ばかりでなく、北条一門中の庶流の人々の政治的発言力をほとんど無力化し、得宗及びその被官の手中に政治の実権が移行し、得宗専制体制が確立するのは、時宗・貞時の時代であろう。たしかに時頼の時代には、執権の地位を退いたのちにも、なおかつ政治の実権を握り、むしろ自由に幕政を操るといふ例がひらかれた。この場合、得宗の地位に在るがための、政治権力と解さねばならない。しかし、誤解を避けるために一言加えるならば、時頼のそうした前執権・得宗としての政治権力は、執権長時の時代に発揮されたものである。時頼自身が執権の地位に在る時期には、むしろ執権政治の成熟した時期と見るのが妥当であろう。

それはともあれ、得宗専制政治の実現により、狭義の執権政治は終り、また広義の執権政治——北条政權——は変質した。そうした政治体制の変化には、もちろん、歴史的必然性があつた。それはいかなるものであろうか。いうまでもなく、新しい政治体制の成立は、執権政治そのものが内包した諸矛盾を打開する方向のうちに、その成立原因を持つてであろう。いわば、執権政治という一つの政治体制の歴史的帰着が、得宗専制政治であつた。

得宗専制政治の崩壊

得宗専制体制は、北条時宗が家督の地位にすわり、さらにそれが嫡子貞時にうけ継がれた時代に、その確立期を現出した。とくに時宗は、この体制のもとで、蒙古襲来という未曾有の国難を切りぬけることに成功したのである。しかし、この得宗専制政治も、幕府体制を維持する上から見れば、多くの矛盾を内包していたし、また代々の得宗が比較的若年でその地位につかねばならなかった必然的結果として、多くの弱点を露呈しはじめた。

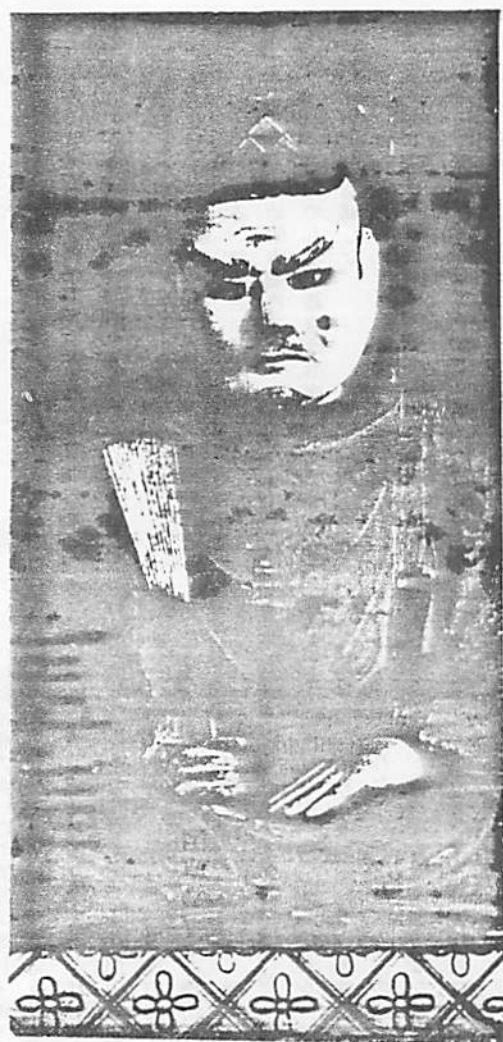
すなわち、第一には、得宗の被官たる御内と、本来の「鎌倉殿」の御家人たる外様（御家人）との対立の激化であり、第二には、御内人の代表者ともいべき内管領の政治的発言権の増大、さらには内管領による実権掌握とその専横という事態の現出である。

弘安八年（一一八五）十一月に起こった霜月騒動（弘安合戦）は、御内人の政治的抬頭に不満をもつ外様御家人の代表者安達泰盛の最後の抵抗であったが、内管領平頼綱の策謀により、執権貞時が安達氏を討滅するという結果となった。御内勢力の勝利である。

その平頼綱は、やがて専横の振舞いが多くなるが、それに対しては、さすがに執権貞時も黙過しえず、これを攻め滅すことよって（平頼綱の乱、正応六年・一一九二）、得宗の

権力を保持することに成功した。しかし、貞時の時代が終り、その嫡子高時が九歳で家督をつぎ、十四歳で執権となるに及んで、内管領の政治権力の増大は決定的となる。とくに長崎高資が内管領になると、執権の地位をも左右するに至り、得宗高時もこれを抑えられないほどになった。こうして得宗専制政治は全く変質し、内管領が実際上の権力者として、すでに御家人体制の動搖が激しく、社会経済上の諸矛盾の前に末期的様相を示していた鎌倉幕府を支え、また討幕の勢いに抵抗したのであった。

（学習院大学教授）



北条時宗の肖像（鎌倉時代）



鎌倉時代の庭園

北条一族・不人気の原因

とかく人間はこういう連中に拍手を贈りたがる。たとえば豊臣秀吉、秀吉ほどの庶民ではないが戦国の一小名にすぎなかった織田信長。彼らがそのよい例だが、その類型に属しながら、とんと評判のあがらない人物がいる。北条時政がその一人だ。

と書けば、異論が出るかもしれない。彼は主人筋にあたる源氏の將軍を二人までも殺したではないか、と。が、そのことを問題にするならば、秀吉、信長も同罪である。秀吉は信長の死後まもなく、三男信孝を攻めて死に追いやっていく。信長の場合は、將軍義昭を（死なせないまでも）追払った話が有名だが、それ以前、主人筋にあたる清洲の織田家を滅ぼしてしまっている。また北条氏については、二代將軍頼家の死はたしかに彼らの意図が働いているが、三代將軍実朝の暗殺事件については無関係である。これは私には確信をもって言えることだが、この事は後でふれたい。

ともかく、北条氏は、とりわけ酷薄ではないのである。はつきりいえば、覇者として

の悪人ぶりは、秀吉、信長程度であつてそれ以上ではないということだ。もし秀吉や信長を英雄と呼ぶのなら（私はそういふ言ひ方は大嫌いなのだが）、彼ら北条一族もそう呼ばれていいはずである。

にもかかわらず、彼らが人気がなかったのはなぜか。これはひとえに後世に残つた歴史書のせいなのだ。いや、そう言うのも言いすぎだ。彼らが滅んでまもなくのうちに書かれた歴史書の中では、むしろ彼らはかなりの評価を得ているのに、その後、とりわけ明治以後の歴史書の中で、彼らへの評価は不当に重められていった。このへんでもう一度彼らの姿を再検討し、評価しなおすことも必要ではないだろうか。

結婚外交で成功した時政

時政の出自ははつきりしない。「尊卑分脈」では東国の有力者平直方の子孫ということになつてはいるが、これを裏づける史料は見当らない。現在の学界ではこの系図についてはむしろ否定的で、伊豆の西北部の狩野川沿いの現在も北条という地名の残るあたりを拠点とした小土豪と見ている。時政時代の北条氏は、つまり、信長ほどの領地も武力もなく、さり

とて秀吉ほど貧しい庶民ではなく、ごく平凡な東国武士の一人ということになる。

当時の東国武士団は大小さまざまある。畠山とか足利のように現在の県単位の広大な土地を領有するもの（もつとも畠山氏の領地の武蔵は小武士団が混在し、全部を畠山氏が領有しているわけではないが）、千葉氏、三浦氏のように県の一部を領有し、一族がびっしりと根を張りあげていたものなどがあるが、これに比べて北条氏の領地はごく狭い地域に限られている。現在ならせいぜい有限会社とか合資会社クラスで、天下の財閥、マンモス企業では決してない。

その小土豪が、ともかくも頼朝の旗揚げの戦いに中核的存在になつたのはなぜか。いうまでもなく、時政の娘の政子が頼朝の妻だつたからだ。これについて、時政が頼朝の將來を見通して娘の婿にした、という説があるが、これは当を得ていない。平家によって伊豆に流されてきた頼朝が、政子と結婚したのは平家の全盛時代より前のことで、少くともその時点では、平家滅亡の兆は全く見られず、従つて頼朝の前途はまっくらだった。

だから時政はこの結婚に反対している。それを政子は押しきつて頼朝と結婚してしまつた。彼女もまた打算があつたのことはない。伊豆の田舎娘にすぎない彼女は、流され人ながら、都人ふうの美男子であつた頼朝に、すっかり魂を奪われてしまつたのだ。

二人の間には女の子が生れた。その数年後、俄かに世の中の風向きが変り、いわゆる旗揚げの戦いとなるのだが、これも実は平家方が時代の動きに神経質になり、頼朝の身辺を洗い直し始めたので、むざむざ殺されるよりはと、行動を起したのである。

いわはせつばつまつての旗揚げだった。頼朝の舅である以上、時政もこれに従わざるを得ない。が悲しいかな集まった同志や家来を併せても数十人。これが日本の歴史を変える大変革の起点になろうとは、時政自身、思ってもみなかったに違いない。

周知のごとく、この旗揚げの第一戦は成功だったが、その後平家方の武士と石橋山で戦ったとき、頼朝方は惨敗する。このとき頼朝方は三百、相手方は三千というから、とうてい太刀打ち出来る相手ではなかった。

その後頼朝は房総へ逃れ、ここで勢力を盛返して鎌倉に本拠を定めるが、しばらくの間北条時政は鳴かず飛ばすである。いくら頼朝の勇敵だといつても小土豪の悲しき、畠山だの足利だの上総だのという大名連とは引を並べることができなかつたのだ。

このほか、小山、三浦といった有力武士は頼朝の父、義朝の時代から深いつながりがある。とりわけ小山政光の妻は、頼朝の乳母として、幼年時代養育にあつた一人である。当時の乳母は実母よりも密接な関係があり、若君を育てるためには一家をあけて、一生奉

仕するしきかりな、だからその縁は深い。

頼朝の乳母にはこのほか比企能員がいた。埼玉県の比企郡あたりに所領を持ち、流され人の頼朝に二十年間生活の資を送り続けた女性である。この尼の娘婿は比企能員、安達藤九郎盛長、河越重頼などという東国の有力武士で、尼の使となって絶えず頼朝の身辺に出入りしていた。

これらの人々がわつとばかり鎌倉に集まつて来ると、しぜん時政の影は薄くなる。娘の政子を送りこんだくらいでは大きい顔はできないのだ。だからこの時期、時政は頼朝の側近として目立った活躍をしていない。鎌倉の陸軍大臣兼検査長官ともいふべき重要ポストの侍所の別当(長官)になつたのは三浦一族の和田義盛だし、それに次ぐ所司(準長官)には鎌倉の地元有力者、梶原景時が任じられた。

いわばこの時期は時政の離伏時代である。そこで少しずつ彼は地盤を固めてゆく。第一番めに行つたのは結婚政策だ。まず頼朝のお声がかかりという形で、政子の妹を下野の大家族足利義兼に嫁がせた。ついでその妹を武蔵の桶川重成に、その下の妹を畠山重忠に、このほか源義経の兄全成(もとの今若)と結婚させた娘もいる。これまでの北条氏ではとても相手にされそうもない大家族との縁組みである。頼朝の「御威光」をフルに活用した平和攻勢といえるだろう。

その後始まつた平家攻めでは、いっばしの

戦功を樹てようとしたらしいが、これは成功しなかつた。実際に戦場に出かけたのは息子の義時だが、手勢の少ないせいもあろうか、ろくな手柄も樹てずに帰つて来た。

もつとも戦いが終つて外交の季節が到来すると、俄然時政は手腕を発揮する。弱小家族にすぎなかつた彼は、いつのまにか鎌倉を代表して上洛し、朝廷や公家を相手にかなりの外交手腕を発揮するのだ。彼の任務は、いわば鎌倉武士の権利を主張し、日本国内の軍事警察権を掌握する地固めのようなものだったが、彼はほぼそれに成功した。はじめは「北条九」(九はいささか軽薄をこめた呼び名)などといつていた公家も、彼の手腕にはかなり一目おいたらしい。

こうしてみると、この時期の北条氏は、武力よりも、むしろ外交手腕で、じわじわと頼朝側近で勢力を貯えて来たよう、と思われらる。

智謀にたけた義時の政略

しかし時政の棟頭も、頼朝が死ぬ、頼朝を来す。代つてのしあがつて来たのは比企氏である。先に書いたように比企氏は頼朝の乳母だつたから、その縁、頼朝・政子の間、に男の子(後の頼家)が、頼朝・政子・比企氏の女になつてゐる女性です。頼朝、頼家

頼家が成人すると、能員は娘を彼に近づけ、やがて頼家とその娘（若狭局）の間には、一方（幡）という男の子も生れる。

まさに比企時代の到来である。時政は一步後退して無念の涙を吞む。そのうちに頼家が重病にかかり危篤に陥った。もし彼に万一のことかあれば、後を継ぐのは、若狭局の生んだ一方、ということになる。

そうはさせじ！

北条氏はあえてこのとき実力対決に出て、比企能員を謀殺し、若狭局や一方を含めた一族を皆殺しにしてしまう。皮肉にもその後頼家は危篤状態を脱し、怒って北条氏を討とうとするが、事前に事が洩れて、將軍をやめさせられ、修禪寺に幽閉されてしまう。頼家の死んだのはその一年後、どうやら北条氏の放った刺客に暗殺されたらしい。

この事件を機に、鎌倉には血なまぐさい争乱が次々に起る。しかもこのとき、一方の中心にいるのは、必ず北条氏である。つまり、弱小家族にすぎなかった彼らは、それまでに十分武力も貯えていた、ということになる。

頼家の後をついだのはその弟の実朝だ。このとき、実朝の乳母は、政子の妹の阿波局——まさに全成と結婚した女性である。彼女はこのときまでに、実朝を將軍にするべく、密に廻ってかなり工作もしている。まさに一家をあげて実朝擁立を推進し、ここに北条体制が確立した。こうして、時政をはじめて、執権

という役につき、幕政を掌握するのだが、それもつかのま、北条氏内部の内紛からたちまち失脚し、伊豆へ引退させられてしまう。

代って執権の座につくのは息子の義時だ。彼はそのとき、すでに四十すぎ、それまで目立った活躍はほとんどしていなかったが、主役の座につくや否や、人が変わったように、あざやかな政治手腕を発揮しはじめる。

長年侍所の別当として勢力のあった和田義盛を挑発して挙兵させ、討死させてしまうのも彼だ。それ以後彼は侍所別当も兼任し、行政軍事両面の権力を一手に掌握してしまう。

さきに書いたように和田義盛は三浦一族である。これまでの歴史ではあまり注目されていないが、この三浦氏は比企なき後も北条氏と比肩し得るくらいの大勢力を保ち続けた豪族だが、この三浦の総帥の義村と北条義時の虚々実々の聖引きは、現代の政治家のそれより数倍すさまじく、かつ智謀にたけたものである。その一々をあげることはできないが、例の実朝暗殺事件もその一つで、実は公暁に実朝を殺させるべく、裏で糸をひいていたのは三浦氏なのだ。

なぜなら三浦氏は公暁の乳母だからだ。彼らは共謀して、北条氏が乳母としてかしく実朝を討つたのである。いわばこの事件は乳母とうしの覇権争いであって、実朝と公暁はいわば彼らに操られた人形にすぎない。——というのが私の解釈なのだが、これを書くこと

は本旨ではないのでくわしい事は省略する

が、ともかく、このときの事件の政治的地理のしかたなどにも、義時と義村のあざやかな手腕が窺えて大変おもしろい。こんなふうには、義時は武人というよりも政略家である。日本人には稀な冷静さを持ち、大局的な判断を失わない。北条政権は、まさに彼の権謀によって確立したというべきだろう。

中世の旗手として

とはいうものの、彼は単なる策略好きの権謀の人ではない。政治は常に半面は覇権争いであり、相手の権謀に勝つためには、それ以上の権謀が必要である。が、それに終始しているだけだったらそれは権力の亡者である。問題はその先にある。その人物が歴史の中で、その両手を先に押しすすめるか、後へひき戻す役をするか、である。

義時にとって、その試練のときは、承久の乱だった。かねて武士の擡頭を快からず思っていた朝廷側は実朝の死後、まもなく難題を持ちかけて来た。後鳥羽上皇の愛姫、伊賀局の莊園の地頭になっている武士を解任せよ、——というのがそれである。この地頭というのは莊園内の警察権を握る武士であって、將軍が任免権を持っている。東国の御家人たちは勅

きに死して地獄の職を与えられ、それに伴う経済権を得ていたわけだから、いわば彼らの生命線ともいへば権利である。

朝廷がこれを否定しようというのは、あくらかに武士の権利を取上げて頼朝卒兵以前の状態へ押し戻そうという意図によるものだった。

このとき、義時は敢然としてこれを拒否した。彼は武士の代表者として、はっきりと武士の権利を守ったのである。あたりまえのことのようだが、これはなかなかできないことだ。政界のトップになると、とかく、自分の立っている地盤のことを忘れる。為政者意識が先に立ち、下にいる者の利益を切棄てるのが、義時はそれをしなかった。そこで朝廷側は義時追討の院宣を発し、兵を挙げるのだが、義時側に立つて大挙上洛して来た鎌倉勢のため、たちまち敗北を喫してしまう。

考えてみれば、これまで武士は常に朝廷の命をうけて戦ってきた。このとき初めて彼らは朝廷からの命令をはねのけて戦ったのである。彼らにそれをさせる義時としてはかなり勇気のいることだったと思う。もしこのとき彼が朝廷と妥協していたら日本の歴史は大きく後退してしまっただろうかもしれない。その意味で彼は日本の歴史の中で珍しく歴史の流れを見誤らなかつた政治家といえるだろう。

義時の後はその子、泰時が継いだ。彼は水久の乱の折の鎌倉勢の総大将である。が、義時にもまして逸話の少ない地味な人間で、父

親の路線を、くり継ぎしていった。武家

法である貞永式目を作って、さらに武家社会を安定させた彼は「道理」という言葉が好きで「道理」と聞いただけで涙をこぼしたという話がある。これはいささかオーバーだか、道理つまり、道にかなった生き方をまず第一義に考えたマシメ人間ではあつたようだ。

こうしてみると彼ら三代は、まさに中世の旗手だったといつてよい。信長や秀吉のような個人的ぜいたくもせず、しかも歴史を見通す眼はさらに広く堅実である。日本にとって最も大きな変革の時代だった鎌倉期——その変革の深さは、彼らの智謀と政治的手腕によつてもたらされた、といつてもいいかもしれない。
(作家)



▶八代執権北条時宗像(田覚寺仏日庵蔵)



義時墓

北条泰時の墓

鎌倉仏教

「末法世相」の訪れ

ひとつの時代が大きく揺れ動く時期、たとえば古代から封建社会への転換、つまり、平安時代から鎌倉時代への移り変りをなした原因が何であつたのか。その点を考えてみないと、「鎌倉時代の仏教」は正しくはとらえられないように思う。

俗に末期の症状というが、平安中期以後その苦悩の表情は日を追って深まっていた。この現象のうち最も人心に直接の不安を与えた「天災地変」について調べてみると――

元永元年（一一一八）から養和元年（一一八一）のわずか六十三間に、記録に遺る天災地変だけでも十三回もある。それらは大雨・冷害・炎旱・地震・洪水・暴風・大火等で、むろんこうした天災の当然の結果として、大凶作がもたらされ、飢饉と疫病が流行した。「方丈記」の作者鴨長明は、養和年間の飢饉を次のよ

うに書いている。

「前の年、かくのごとく、からうじて暮れぬ。明くる年は、立ち直るべきかと思ふほどに、あまりさへ疫病^{（疫病）}うちそいで、まささまに、跡かたなし。世の人みな病み死ぬれば、日を経つつ、きわまりゆくさま、少水の魚のたよえにかなえり。（中略）菜地のつら、道のほとりに、飢え死ぬるものたぐい数も知らず。取り捨つるわざも知らねば、くさき香世界に満ち満ちて、変りゆくかたち有様、目もあてられぬ事多かり。」

また同じ「方丈記」の中の有名な記録としては、仁和寺の隆堯法師が、餓死者の顔に梵字の阿字を書いて回向したところ、京都の一条から九条、京極から朱雀の間だけで、わずか二ヶ月間で四万二千三百余の死者があつたという。こうした天災地変の惨禍を最悪の状態にまで追ひこんだのは、当時の為政者（公家貴族）の無能ぶりによる。たとえば交通の不備、備荒貯蓄制度の不徹底、いわゆる政治力の貧困のせいである。

さらに精神的な面では、古代仏教（奈良平安仏教）の無力化を見のがすことができない。腐敗と墮落の中に形骸化した古代仏教には、も

はやこの世相の中にとまどう人々を強く教化指導してゆくだけの力はなかつた。その墮落ぶりは僧侶個人の生活だけの範囲にとどまらず、その教団全体が卑俗化の一途をたどり、さらにはいわゆる派閥に分れて南都も北嶺も、それぞれ醜い政争に血まなこになつてゐる始末であつた。

ちなみに京都の神護寺に遺されてゐる「四十五箇条起請文」という当時の寺僧に対する戒めの文書には、他人の財物を横領してはならない、僧侶が美服をまもつてはならない、寺の内で博奕をしてはならない、寺に夜間女性を泊めてはならない等々、いわゆる厳しい禁令があげられ、いかに僧侶の破戒行為が多かつたかを物語つてゐる。

さてこうしていくつかの視点（世情・政治・宗教）から眺めてみて率直にいえることは、その当時の人々が信じ恐れていた「末法の世相」が到来したのではないかということである。すなわち「末法思想」とまで称されている「仏法流布の最後の顛覆期」にあたり、末法突入の年は永承七年（一一五二）、とどまることを知らない天災飢饉が社会不安をますます深めていったのである。

僧侶の口からも「末代悪世」「法威以後」「濁世」などの表現がしきりに出ており、また貴族たちの日記類にも、「ひとえにこれ末代におよんで仏法破滅か」（右大臣藤原宗忠・「中右記」）とか、「仏法王法滅盡の期至るか、五濁の世、天魔その力を得て云々……およそ五濁悪世、斗諍堅固の世、かくの如きの乱逆難を ついで絶えざるか、悲しむべし云々」（九条兼実・「玉葉」）と、その沈痛の面持ちがうかがえる。この「五濁」とは、世相の濁り・思想の濁り・官能的な濁り・我利我欲による濁り・生存競争に伴う濁りをいい、人間世界の全てが汚濁の中にたうつているといふことである。

しかし「末法到来の思想」は表面的には厭世的・消極的な世相観であるが、見方をかえてその底に流れている「正法恢復」への人々の執拗な、そして本能的な欲求を把えねばならないのではないか。つまりそうした深淵に立たされた人々の切迫した純粹なわがいが、次の新しい時代を呼びおこす胎動となっているからである。さらに見のがすことのできない点として、仏教の世界観としての無常流転の思想は、眼前に披瀝された

末法悪世の諸現象によって一層そのことが深められていったということである。それが「方丈記」「平家物語」のような無常観をテーマとした文学を生み出してきたといえよう。

六人の開祖たち

鎌倉新仏教の誕生は日本における宗教改革といわれるように、古代仏教の否定をその前提にしている。ということとは、古い権力、つまり貴族政権が否定されて新しい権力、武家政権に替っていったことをも併せて考えておかねばならない。古代仏教の体質は大伽藍を建て、祈禱を重視し、学問を重んじたということだ。

いわゆる貴族仏教の性格であった。したがって富裕な個人のための仏教に偏っていたのだ。それは仏教本来の人間平等という立場から縁遠く、庶民の大半は当時の仏教にとつては文字通り、縁なき衆生・ということであった。したがって鎌倉時代の庶民が生きぬいてゆくことの苛酷さを考えると、彼ら庶民は死ぬ苦しみの方が生きながらえる苦しみより楽だと受けとつていたようにみえる。また僧俗共にみられる特異な傾向として、「遁世」や「隠世」という世をすねた生きざまがみられた。そして時代の転換期に遭遇して庶民は非常に孤独であり、また無力この上ないものであったわけだ。

こうしたいわば国家はあれども收拾のつかない末法乱世の暗黒の中か



一 遍上人像

ら、あたかもその「時」を待っていたかのように、それぞれの信ずる旗幟をかかげて新しい仏教を弘めようとしたのが、法然・親鸞・一遍・日蓮・栄西・道元の六人の開祖たちである。なおこれらの鎌倉新仏教六削唱者に共通している点は、あらゆる層の人間に平等に分ち与えたということであつた。さらにもっと重要な点は、これらの宗教者によつて初めて人間を正しくみることが可能になつたということである。つまり「人間とは何か」という問題を、深い宗教的立場にそつて追究してゆく、そういう「宗教的人間観」が確立されたといえよう。いいかえれば人間——とくに庶民——に対するあなたたかい愛情の心がそそがれたときに、原点にたち還つた本當の仏教が生れてきたということである。

そこで、その宗教的人間観をさらに浄土教的立場で把えていつた法然上人・親鸞上人の思想をさぐつてみよう。

法然上人の遺した法語を読んでみると、「十悪五逆の衆生」「罪悪生死の凡夫」「無智のともがら」などの表現に再三出合う。また親鸞上人においても「罪惡深重煩惱熾盛の衆

生」「煩惱具足のわれら」という言葉にしばしばぶつかつた。

この二人の宗教者は共通して「末代惡世」としてその世相を見、「罪惡深重の凡夫」として人間をとらえている。

たしかにこれらの異常とも思えるほどの性惡説的な表現は、顔面通り受けとれば熾しい徹底的な人間否定である。再び立ち上れぬほどの打撃を与えてしまつた感がある。しかしそれは、冷酷な「人間否定」のままでは終つていない。より深いところで「人間恢復(肯定)」のきつかけが残されているのだ。しかも惡人ほどそのきつかけの機縁に多くめぐまれているといつてゐるのが親鸞上人ということになる。いわゆる「惡人正機」といわれるゆゑである。

さて、その「人間恢復」のきつかけとは何か。それは「称名念仏——南無阿彌陀仏」をその愚痴無智の人々の口でとなえさせるといふことなのだ。

また法然上人にしても親鸞上人にしても、「濁世・惡世・末代など」、これも表面的には現世否定であり、この世からの脱出・超脱が希求され、それはとりもなおさず「來世往生」

という、現実世界に対する消極的な否定の態度とみられる。

しかしその眞のねらいは、とくに親鸞上人においては單なるベシミスティックな現世放棄ではなく、そういう主張を踏み台として、現実の中に宗教的な絶対者との融合の境地をとらえている。

以上のような人間観に立ち、世相観に換つてゐるといふことは、浄土教の削唱者が古代仏教の否定を契機として仏教の原点に還つて、「誰が救われるべきか」を眞摯に問うたのであると思ふ。

つまり宗教的愛情をもつて眞剣に人間の内面の極を追究し、ありのままにその生きざまをとらえた結果、「十悪五逆の衆生・無智のともがら・煩惱具足のわれら」等々の表現となり、この人々こそ救われるべきであるといふ結論に到つた。

そしてここでもう一つ見逃してならないことは、古代仏教にみられる個人救済ではなく、「衆生・ともがら・われら」の言ひ方にみられるとおり、貴賤老若男女を問はず衆庶のための仏教でなくてはならないということである。

たとえば念仏衆生・門徒・ご同朋

・同行・時衆などの呼びかけの中には、このことが如実にいい現わされているとみられる。

「だれが救われるべきか」

前にものべたように鎌倉仏教は六人の開祖によって始められ、その六師に共通することは人間平等の思想から、あらゆる階層の人々に仏教の教えを平易に説き、またその行法も口称念仏・専唱題目・只管打坐という単純なものであった。

しかしもつすこしくわしくこれらの開祖たちの教えるところを観察してみると、次のような違いのあることに気づく。

まず鎌倉仏教の先陣に立った法然上人は民衆への宗教的希望を未來型の理想世界（來世・西方極樂浄土）として与えた。こういう未來指向型で救いの手をのべたということは、法然上人の活躍された時期がこの転換期の中でも最悪混乱の状態にあつたから、いきおい現実否定に立たざるを得なかった。ところが、同じ浄

土教でも親鸞上人・一遍上人の教えによれば、極悪深重の凡夫に対し困惑悲痛しつつも、弥陀の本願念仏によって、この現実世界（娑婆世界・穢土）に仏と一体になれる宗教的境界をきりひらくまでになってくるのである。

四割が、武士の寺

さて、こうした変動の激しい転換期に鎌倉仏教はそれなりの拠りどころをふまえてたどっていったが、鎌倉時代を特色づける武家と鎌倉仏教とのかわり合いについてふれておこう。

まず武士階級が浄土教に帰依した実例がきわめて多いということだ。常識的に考えてみると禅宗（臨済宗・曹洞宗）に接近し、その要素を武士は多分にもっているように思えるのだが、事實はすでに平安期の武士たちにもみられるように、浄土門信仰への傾斜が目立っているのだ。そして浄土教の中でも恵心院源信（『往生要集』の著者）の影響を著しく源

ている。一例をあげると鎌倉時代初期の東国武士たち、すなわち甘糟忠綱・津戸為守・宇都宮頼綱・園田成基・熊谷直実・和田朝盛・千葉常胤など一騎当千の武士が、法然上人を始め多くの浄土教の僧侶の門に入って念仏修行したことが伝えられているし、また武士みずからが諸国辺地をめぐる念仏信仰を勧進したという事実も多くみられる。

では禅仏教と武士のかかわり合いはどうかというと、この点につき、現在鎌倉市内にある各宗派の寺院（鎌倉市史社寺編記載の寺院）について、それぞれの開基（寺院開創に尽力した資主）を調べてみると上記の問いに対する一つの答えが出てくる。

○天台宗（二ヶ寺）一応開基をあげているが伝承に

よるもの

○真言宗（十六ヶ寺）開基不詳七ヶ寺

残る九ヶ寺の

開基のうち五ヶ

寺は北条氏関係

○臨済宗（十四ヶ寺）開基不詳三ヶ寺

他は北条氏六

足利氏二、上杉

氏一、一階堂氏一

○曹洞宗(二ヶ寺) 後北条氏と浜地氏

○浄土宗(十三ヶ寺) 開基不詳七 他

は北条氏三、そ

の他三

○時宗(七ヶ寺) 開基不詳六 他

は後北条氏

○浄土真宗(一ヶ寺) 開基不詳

○日蓮宗(二十八ヶ寺) 開基不詳二十五

残りは智恵氏、

石井氏、比企氏

このごく簡単な開基の調査結果からみても次のようなことがわかる。

(1) 八十三ヶ寺中において開基の明確な寺は三十二ヶ寺で、それらの開基は全部武家であること。

(2) この三十二ヶ寺中北条氏関係(後北条氏は除く)が十五ヶ寺で、きわめて多いこと。

(3) そして北条氏開基の十五ヶ寺のうち、臨濟宗が六ヶ寺、真言宗が五ヶ寺、その他四ヶ寺。

(4) そして浄土宗・浄土真宗・時宗及び日蓮宗には開基不詳が多い。

以上すこし脱線したが、とにかく鎌倉の現在ある八十三ヶ寺の寺院のうち、三十二ヶ寺が武家の開基によるということ(過去において廃寺となつた多くの寺々の開基について調べてみれば、さらに武家関係は増え



悪人正機説で名高い親鸞(天城・阿弥陀寺蔵)

ると思われる)は、やはり一般的にいわれているように、武士と鎌倉仏教との関係は深く、とくに上流に属する武士(たとえば北条氏)と臨濟宗との結びつきはあきらかである。質実簡素を家風とした北条氏だから、臨濟宗寺院にみられる簡易素純・廉潔淡泊の参道精神に多くのものを学びとり、武士道という倫理思想の基礎づくりに大いに役立ったのだらう。とくに仏教の報恩思想は武士道の思義観の根底にその基をすえているといえる。

最後に鎌倉仏教についての結論めいたことを記しておこう。

一、平安後期より鎌倉初期の世相をいわゆる末法時代への前ぶれとし

てとらえているが、それはむしろ鎌倉仏教誕生の有効な契機となつている。しかもこのようにして日本に仏教が本物として根づいたとみられる。

二、この日本の風土に仏教が根づいたその大きな要因は、鎌倉仏教の六開祖による宗教的・人間観の確立にあった。それは「人間とは何か」という素朴な問いかけと、「だれが救われるべきか」という愛のこもつた真剣な宗教的追究にあつた。

三、武家政治を支えていた武士階級と鎌倉仏教とのかわり合いは、人間本来の姿として浄土教を、武士道という倫理思想の上からは禅仏教をといて二面がみられる。

(鎌倉・蓮衆院住職)

● 仏教主要年表

- 文治三(一一八七) 3 荣西入宋
 建久二(一一九二) 7 荣西帰国、臨済宗を伝
 える
 建久五(一一九四) 7 荣西、延暦寺衆徒の訴
 えにより神宗普及を禁止される
 建久九(一一九六) この年、荣西「興禪護国
 論」を著す
 正治二(一一九三) 5 幕府、念仏宗を禁止、
 建永二(一二〇七) 2 幕府、専修念仏を禁止、
 源空・親鸞を流す
 建保三(一二一一) 7 荣西没
 貞応三(一二三三) 8 専修念仏禁止される
 この年、親鸞「教行信証」著す
 嘉祿三(一二三三) この年、道元宋より帰国
 嘉祿四(一二三六) 3 浄光、鎌倉に大仏建立
 寛元二(一二四四) 7 道元、越前水平寺を開
 く
 寛元四(一二四六) この年、宋僧蘭溪道隆来
 日
 宝治元(一二四七) 8 時頼、道元を招く
 建長五(一二五三) 8 道元没、11 建長寺落慶
 文応元(一二六〇) 7 日蓮「立正安国論」を
 時頼に進言、8 鎌倉の僧徒蜂起し
 て、日蓮の松葉ヶ谷の草庵を焼く
 弘長元(一二六二) 5 日蓮、伊豆伊東に流さ
 れる
 弘長二(一二六三) 11 親鸞没

- 文永八(一一九一) 9 幕府、日蓮を竜口一軒
 ろうとし、さらに佐渡に流す
 文永十(一一九三) 2 幕府、日蓮を許す、5
 日蓮、甲斐身延山に行く
 弘安元(一二七九) 7 蘭溪道隆没
 弘安二(一二八〇) 6 宋僧無学祖元、時宗の
 招きで来日、8 祖元、建長寺住持
 となる
 弘安五(一二八三) 10 日蓮没
 弘安九(一二八七) 9 無学祖元没
 正応二(一二八九) 8 一遍没
 正安四(一二三三) この年、幕府、一向宗徒
 の活動を禁止する
 嘉暦二(一二三三) 2 夢窓疎石、鎌倉浄智寺
 に住み、瑞泉寺を創建



曹洞宗の開山・道元 (世界文化社提供)

参考図書
 古都鎌倉
 郷土資料事典
 鎌倉

読売新聞社
 人文社
 実業之日本社

史跡めぐり資料
 越谷市郷土研究会
 山崎善司理事
 昭和58年10月23日